

県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第3冊

北野遺跡
鎌野西遺跡

2020.3

香川県教育委員会

序 文

本書には、県道中徳三谷高松線建設事業に伴い平成13～15年度に発掘調査を実施した、香川県高松市三谷町に所在する北野遺跡（きたのいせき）と鎌野西遺跡（かまのにしいせき）の報告を収録しています。

北野遺跡の発掘調査では、弥生時代前期の水田を検出しました。この水田に隣接する縄文時代晩期の自然河川と併せて、地質の検討やプラント・オパールなどの分析を行なった結果、水田形成にまで至る過程と、その後の廃絶状況を明らかにすることができました。

また、鎌野西遺跡では、弥生時代後期の水路から農具とみられる木器が出土しました。この木器は、この時期に一般的な鋤や鍬とはやや異なっており、その詳細な性格などについては今後の研究の進展が待たれます。

発掘調査終了後、本報告書刊行までに長期間が経過しましたが、この成果が本県の歴史研究の資料として今後広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、県土木部道路課並びに関係各機関・地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも埋蔵文化財保護行政並びに当センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2020年3月

香川県埋蔵文化財センター
所長 西岡 達哉

例言

- 1 本書は、県道中徳三谷高松線建設事業に伴い平成13年度から平成15年度にかけて実施した、北野遺跡（香川県高松市三谷町北野）1・2次調査、鎌野西遺跡（香川県高松市三谷町鎌野）1～3次調査の発掘調査の本報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、発掘調査は平成13年度から平成15年度にかけて財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（当時。現在は解散）に委託して実施し、整理作業は平成30年度に香川県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

北野遺跡

 - 1次調査
期間 2001年4月1日～9月30日
担当 木下晴一・柏徹哉・大塚純司
 - 2次調査
期間 2003年4月1日～7月31日
担当 西村尋文・細川健一・飯間俊行

鎌野西遺跡

 - 1次調査
期間 2001年5月1日～11月30日
担当 川原和生・長井博志・武井美和
 - 2次調査
期間 2002年4月1日～10月31日
担当 森下友子・小林明弘・加納裕之
 - 3次調査
期間 2003年4月1日～7月31日
担当 西村尋文・細川健一・飯間俊行
- 4 発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。

香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。乗松真也、辻康男・辻本裕也・馬場健司（パリノ・サーヴェイ株式会社、当時）、藤根 久・米田恭子（株式会社パレオ・ラボ）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）が執筆し、乗松真也が編集を担当した。

- 6 本書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第IV系)で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
- 7 遺構は、次の略号により表示した
SA：柵 SB：建物 SD：溝 SK：土坑 SN：水田 SP：柱穴 SR：自然流路
- 8 遺構断面図の水平線状の数値は水平線の標高線(m)である。
- 9 遺構断面図中の注記の一部については、色調に小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れ痕の範囲を示している。断面図中の斜線は石理の方向を模式的に表している。図の左側に展開した面をA面、右側の面をB面として記述する。石材は表記が無い限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期は以下の文献に拠った。
縄文時代晩期
森下英治 2000「讃岐地域の突帯文土器」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会, pp.401-43
弥生時代前期～中期初頭
森下英司 1998「龍川五条遺跡出土前期弥生土器の編年」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター編『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告第29冊 龍川五条遺跡Ⅱ 飯野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会ほか, pp.285-325
信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」第16回古代学協会四国支部研究大会事務局編『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』古代学協会四国支部, pp.5-38
古墳時代前期
信里芳紀 2014「讃岐地域における古墳時代前期の土器編年」四国考古学研究会(古式土師器研究会)編『古式土師器の編年的研究 一四国島の古墳時代前期の土器様相一』pp.3-29
近世～近代
佐藤竜馬 2001「瀬戸内沿岸地域からみた讃岐の焙烙」徳島大学総合科学部歴史学研究室・関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと編『第3回四国徳島城下町研究会[発表要旨・資料集] 四国と周辺出土器 一焙烙の生産と流通一』徳島大学総合科学部歴史学研究室・関西近世考古学研究会・考古フォーラムくらもと, pp.1-90

本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	発掘作業と整理作業の経過	2
第2章	遺跡の位置と環境	4
第3章	北野遺跡の調査成果	
第1節	調査の方法	8
第2節	基本層序	8
第3節	遺構と遺物	25
第4章	鎌野西遺跡の調査成果	
第1節	調査の方法	88
第2節	基本層序	88
第3節	遺構と遺物	88
第5章	自然科学分析	
第1節	自然科学分析の目的と概要	106
第2節	SN01・SR01の古環境復元	109
第3節	弥生土器、粘土塊の胎土分析	132
第4節	石器の蛍光X線分析	144
第6章	総括	
第1節	北野遺跡、鎌野西遺跡の遺構の変遷	149
第2節	北野遺跡水田SN01における区画設定と小畦畔の接合形態	153
第3節	北野遺跡における石庖丁の搬入状況	158

挿図目次

第1図	調査地位位置図	1	第56図	SD26 出土遺物実測図4	65
第2図	周辺遺跡位置図	5	第57図	SR01 トレンチ1断面図	67
第3図	高松平野における弥生時代前期後半の遺跡	6	第58図	SR01 出土遺物実測図	68
第4図	北野遺跡・鎌野西遺跡 調査区割図	8	第59図	SR02 出土遺物実測図	69
第5図	北野遺跡・鎌野西遺跡 断面図	9～10	第60図	SR04 出土遺物実測図1	70
第6図	遺構配置図	11	第61図	SR04 出土遺物実測図2	71
第7図	3区北 北壁断面図	12	第62図	SR03 出土遺物実測図	71
第8図	3区東 東壁断面図	13	第63図	SX01・02 平・断面・遺物実測図	72
第9図	2区西・3区南 西壁断面図	14～15	第64図	第1遺構検出面遺構配置図1	74
第10図	1区北・2区東 西壁断面図	16	第65図	第1遺構検出面遺構配置図2	75
第11図	2区東 東壁断面図	17	第66図	第1遺構検出面遺構配置図3	76
第12図	1区北・1区南 東壁土層断面図	18	第67図	SB01・03 平・断面図	78
第13図	0区 北壁断面図	19	第68図	SB02 平・断面図	79
第14図	0区 東壁・東南壁断面図	20	第69図	SB04・05 平・断面図	80
第15図	第2遺構検出面遺構配置図1	21	第70図	SB06・31 平・断面図	81
第16図	第2遺構検出面遺構配置図2	22	第71図	SB32・33 平・断面図	82
第17図	第2遺構検出面遺構配置図3-1	23	第72図	SK01・02・03 平・断面図	83
第18図	第2遺構検出面遺構配置図3-2	24	第73図	SK05・06・08～11 平・断面図	84
第19図	SN01 平・断面図	26	第74図	SK12・13・32・33 平・断面図	85
第20図	SK07・14・15 平・断面・出土遺物実測図	27	第75図	SD01・03・19・20・22 出土遺物実測図	87
第21図	SK31 平・断面・出土遺物実測図	28	第76図	遺構外 出土遺物実測図	87
第22図	SD05 断面・出土遺物実測図	29	第77図	遺構配置図1	89
第23図	SD07 断面・出土遺物実測図	31	第78図	遺構配置図2	90
第24図	SD08・09・11～14・16・31 断面・出土遺物実測図	32	第79図	遺構配置図3	91
第25図	SD41 出土遺物実測図	33	第80図	C-1区南・東壁・C-2区北・東壁断面図	92
第26図	SD24・SR04 断面図	34	第81図	C-2区 東壁断面図	93
第27図	SR04 断面図	35	第82図	A区 東壁 断面図	94
第28図	SD24 出土遺物実測図1	36	第83図	B区西・南壁断面図	95
第29図	SD24 出土遺物実測図2	37	第84図	D区東・南壁断面図	96
第30図	SD24 出土遺物実測図3	39	第85図	SA101・SK001～004 平・断面図	98
第31図	SD24 出土遺物実測図4	40	第86図	SD001～003・007・SD101～105 断面図・出土遺物実測図	99
第32図	SD24 出土遺物実測図5	41	第87図	SD201 断面・出土遺物実測図1	100
第33図	SD24 出土遺物実測図6	42	第88図	SD201 出土遺物実測図2	101
第34図	SD24 出土遺物実測図7	43	第89図	SD201 出土遺物実測図3	102
第35図	SD24 出土遺物実測図8	44	第90図	SD201 出土遺物実測図4	103
第36図	SD24 出土遺物実測図9	45	第91図	SD201 出土遺物実測図5	104
第37図	SD24 出土遺物実測図10	46	第92図	SD106・202・203・SX0201・202 断面図・ SD203 出土遺物実測図	105
第38図	SD24 出土遺物実測図11	47	第93図	資料採取地点の層序と微化石分析位置	111～112
第39図	SD24 出土遺物実測図12	48	第94図	Loc. 田畦畔検出層準の 不攪乱サンプルの軟X線写真	116
第40図	SD24 出土遺物実測図13	49	第95図	Loc. 1 水田畦畔検出層準の 不攪乱サンプルの軟X線写真	117
第41図	SD24 出土遺物実測図14	50	第96図	暦年代校正結果	118
第42図	SD24 出土遺物実測図15	51	第97図	主要花粉化石群集の層位分布	122
第43図	SD24 出土遺物実測図16	52	第98図	植物珪酸体分析結果・ 植物珪酸体群集と樹木起源珪酸体の産状	123
第44図	SD24 出土遺物実測図17	53	第99図	Loc. 1-12 植物珪酸体含量グアイアグラム	124
第45図	SD24 出土遺物実測図18	54	第100図	胎土分析を行った土器	133
第46図	SD24 出土遺物実測図19	55	第101図	ポイント・カウント法による岩石・鉱物粒子 -粒度分布図	138
第47図	SD24 出土遺物実測図20	56	第102図	ポイント・カウント法による粒度組成図	139
第48図	SD24 出土遺物実測図21	57	第103図	遺跡周辺の地質図	140
第49図	SD24 出土遺物実測図22	58	第104図	蛍光X線分析試料	145
第50図	SD24 出土遺物実測図23	59			
第51図	SD24 出土遺物実測図24	60			
第52図	SD25 断面・出土遺物実測図	61			
第53図	SD26 断面・出土遺物実測図1	62			
第54図	SD26 出土遺物実測図2	63			
第55図	SD26 出土遺物実測図3	64			

第105図	北野遺跡・鎌野西遺跡 時期別遺構配置図 (縄文時代晩期～弥生時代前期前半・弥生時代前期後半)	150
第106図	北野遺跡・鎌野西遺跡 時期別遺構配置図 (弥生時代後期・古墳時代～古代)	151
第107図	北野遺跡・鎌野西遺跡 時期別遺構配置図 (中世・近世以降)	152

第108図	弥生時代前期の水田 1	154
第109図	弥生時代前期の水田 2	155
第110図	畦畔の接合形態による小区画水田の分類	157
第111図	弥生時代前期の石庖丁	159
第112図	関連遺跡位置図・石庖丁石材比率グラフ	161

写真目次

写真1	植物珪酸体	128
写真2	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(1)	141
写真3	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(2)	142
写真4	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真(3)	143
写真5	鎌野西遺跡北野遺跡 遠景(南から)	205
写真6	鎌野西遺跡北野遺跡 遠景(北から)	205
写真7	北野遺跡 調査前状況 2001年4月(南西から)	206
写真8	北野遺跡 調査前状況 2001年4月(北から)	206
写真9	北野遺跡3区東 作業状況(南から)	206
写真10	北野遺跡3区東 SD41(西から)	207
写真11	北野遺跡3区東 SD41 弥生土器出土状況(西から)	207
写真12	北野遺跡3区南1面全景(南から)	207
写真13	北野遺跡3区南 SD19・SR03(南東から)	208
写真14	北野遺跡2区西1面完掘状況(北東から)	208
写真15	北野遺跡2区・3区南2面全景(南から)	208
写真16	北野遺跡2区西・3区南2面全景(北から)	209
写真17	北野遺跡2区西・3区南2面全景(東から)	209
写真18	北野遺跡3区南 SD24 弥生土器出土状況(南西から)	209
写真19	北野遺跡3区南 SD24 遺物出土状況	210
写真20	北野遺跡3区南 SD24、 SR03・04 断面(南から)	210
写真21	北野遺跡3区南 SD24、 SR03・04 断面(南から)	210
写真22	北野遺跡3区南 SD26 調査状況(北から)	211
写真23	北野遺跡3区南 SD26 断面(北から)	211
写真24	北野遺跡2区西 SX02 断面(南から)	211
写真25	北野遺跡2区西 SX02 完掘(南から)	212
写真26	北野遺跡2区西 調査区西壁 SR03・04 断面(東から)	212
写真27	北野遺跡2区東 全景(北から)	212
写真28	北野遺跡2区東 SK12・13 断面(北から)	213
写真29	北野遺跡1区南1面全景(北西から)	213
写真30	北野遺跡1区南 SB 群(東から)	213
写真31	北野遺跡1区南 SD03・04(東から)	214
写真32	北野遺跡1区南2面全景(北から)	214
写真33	北野遺跡1区北 全景(西から)	214
写真34	北野遺跡1区南 SD07(西から)	215
写真35	北野遺跡1区北 SD07 弥生土器出土状況(北から)	215
写真36	北野遺跡1区南 SD07 断面(西から)	215
写真37	北野遺跡1区北 SD05 断面(南から)	216
写真38	北野遺跡1区南 SD08 断面(南から)	216
写真39	北野遺跡1区南 SD11 断面(北から)	216

写真40	北野遺跡1区北 SK07(西から)	217
写真41	北野遺跡1区南 SR01 断面(西から)	217
写真42	北野遺跡1区南 調査区南壁(北から)	217
写真43	北野遺跡0区 SB 群(東から)	218
写真44	北野遺跡0区 全景(東から)	218
写真45	北野遺跡0区 全景(南から)	218
写真46	北野遺跡0区 SK31 断面(東から)	219
写真47	北野遺跡0区 SK31(南から)	219
写真48	北野遺跡0区 畦畔検出状況	219
写真49	北野遺跡0区 SN01 畦畔(西から)	220
写真50	北野遺跡0区 SN01 畦畔(北から)	220
写真51	北野遺跡0区 SN01 畦畔断面(南から)	220
写真52	北野遺跡0区 畦畔 断面(南から)	221
写真53	北野遺跡0区 南東部 SN01 検出状況(東から)	221
写真54	北野遺跡0区 南東部 SN01 畦畔(南西から)	221
写真55	北野遺跡0区 SR01 断面(南から)	222
写真56	北野遺跡0区 SR01 断面(南から)	222
写真57	北野遺跡0区 SR01 断面 調査区北壁(南から)	222
写真58	北野遺跡出土遺物1	223
写真59	北野遺跡出土遺物2	224
写真60	北野遺跡出土遺物3	225
写真61	北野遺跡出土遺物4	226
写真62	北野遺跡出土遺物5	227
写真63	北野遺跡出土遺物6	228
写真64	北野遺跡出土遺物7	229
写真65	北野遺跡出土遺物8	230
写真66	北野遺跡出土遺物9	231
写真67	北野遺跡出土遺物10	232
写真68	北野遺跡出土遺物11	233
写真69	北野遺跡出土遺物12	234
写真70	鎌野西遺跡A区 全景(南から)	235
写真71	鎌野西遺跡A区 SK001 断面(南から)	235
写真72	鎌野西遺跡A区 SD001 断面(北東から)	235
写真73	鎌野西遺跡A区 SD001 断面(北西から)	236
写真74	鎌野西遺跡A区 SD001,002 断面(北から)	236
写真75	鎌野西遺跡A区 SD002 断面(北から)	236
写真76	鎌野西遺跡A区 SD003 断面(東から)	237
写真77	鎌野西遺跡A区 SD006 断面(東から)	237
写真78	鎌野西遺跡A区 SD007 断面(東から)	237
写真79	鎌野西遺跡A区 東壁断面(西から)	238
写真80	鎌野西遺跡B区 全景(南西から)	238
写真81	鎌野西遺跡B区 SA101 断面	238

写真 82	鎌野西遺跡 B 区 SD104 断面 (北から) ……	239
写真 83	鎌野西遺跡 B 区 SD105 断面 (北から) ……	239
写真 84	鎌野西遺跡 B 区 西壁断面 (東から) ……	239
写真 85	鎌野西遺跡 C 区 全景 (北から) ……	240
写真 86	鎌野西遺跡 C 区 SD201 (東から) ……	240
写真 87	鎌野西遺跡 C 区 SD201 断面 (東から) ……	240
写真 88	鎌野西遺跡 C 区 SD201 断面 (北東から) ……	241
写真 89	鎌野西遺跡 C 区 SD201 木器出土状況 ……	241
写真 90	鎌野西遺跡 C 区 SD202・203 (北西から) ……	241

写真 91	鎌野西遺跡 C 区 SD202 断面 (北から) ……	242
写真 92	鎌野西遺跡 C 区 北壁断面 (南から) ……	242
写真 93	鎌野西遺跡 C 区 SX201 断面 (北から) ……	242
写真 94	鎌野西遺跡 C 区 西壁断面 (東から) ……	243
写真 95	鎌野西遺跡 C 区 東壁断面 (北西から) ……	243
写真 96	鎌野西遺跡 D 区 東壁断面 (南から) ……	243
写真 97	鎌野西遺跡出土遺物 1 ……	244
写真 98	鎌野西遺跡出土遺物 2 ……	245

表目次

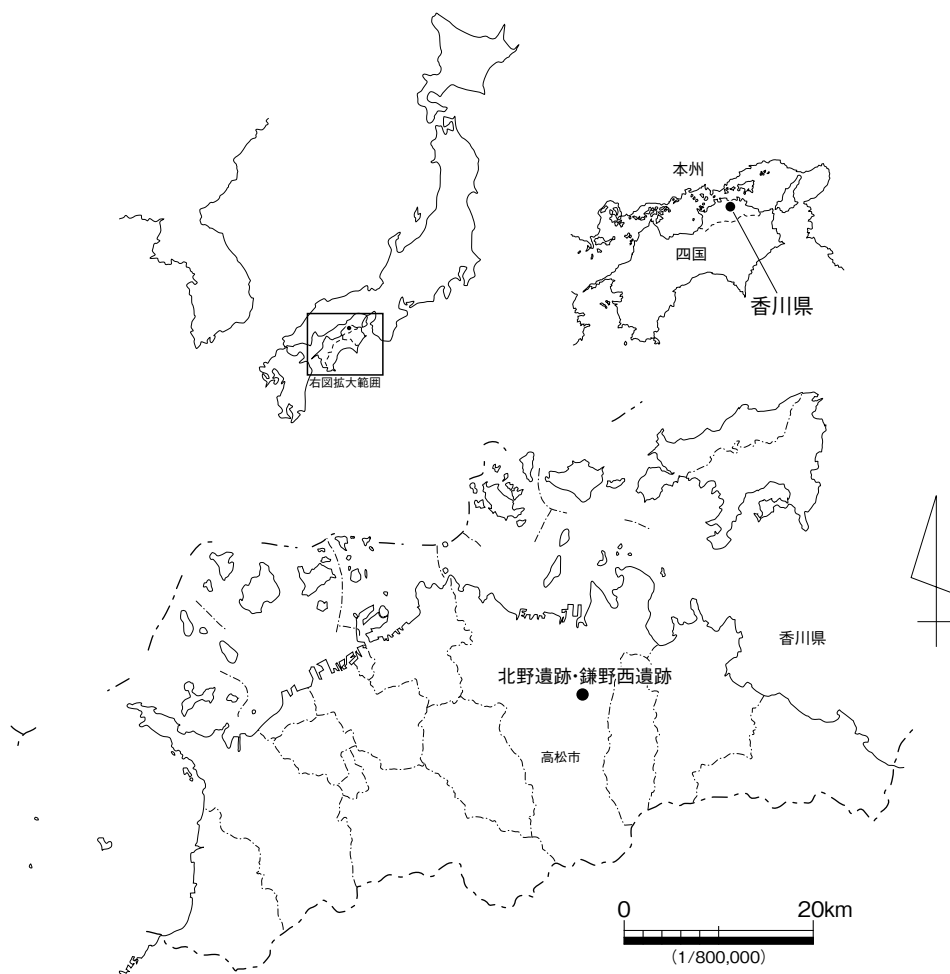
第 1 表	調査期間・面積・担当者一覧 ……	2
表 2 表	SN01 区画の面積・標高 ……	25
第 3 表	香川県内サヌカイト製石器産地分析一覧 ……	108
第 4 表	放射性炭素年代測定結果 ……	119
第 5 表	暦年較正結果 ……	119
第 6 表	珪藻分析結果 ……	119
第 7 表	花粉分析結果 ……	121
第 8 表	北野遺跡 Loc.1・12 の植物珪酸体含量 ……	125
第 9 表	胎土分析試料の詳細 ……	132
第 10 表	ポイント法による粒子の同定・計測結果 ……	135
第 11 表	ポイント法による粒子の同定・計測結果 ……	136
第 12 表	各試料の粘土中の 微化石類と砂粒組成の特徴記載 ……	137

第 13 表	胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表 ……	137
第 14 表	試料一覧及び産地同定結果 ……	144
第 15 表	新たな原石群と遺物群 (藁科 2015 に追加) ……	146
第 16 表	分析結果 (化合物濃度の相対含有百分率 (wt/%)) ……	147
第 17 表	分析結果 (元素比) ……	148
第 18 表	香川県内出土弥生時代前期石庖丁一覧 ……	164
第 19 表	北野遺跡出土土器観察表 ……	179
第 20 表	北野遺跡出土土製品観察表 ……	196
第 21 表	北野遺跡出土石器観察表 ……	196
第 22 表	鎌野西遺跡出土土器観察表 ……	202
第 23 表	鎌野西遺跡出土石器観察表 ……	203
第 24 表	鎌野西遺跡出土木器観察表 ……	203

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

高松平野南部に位置していた高松空港は1989年（平成元）に移転した。移転後の広大な跡地の有効活用のため、香川県は翌年度から「技術・情報・文化の複合拠点」である香川インテリジェントパークの整備を進め、併せて同地の利便性を高めるため東西南北への県道の拡幅、新設を行った。県道中徳三谷高松線のうち、香川インテリジェントパークから南へ新設されたルートは、用地内の埋蔵文化財の保護について、県高松土木事務所と県教育委員会事務局文化行政課（当時）との間で協議が進められた。県教育委員会は平成10年度からの試掘調査によって「上林遺跡」、「北野遺跡」、「鎌野西遺跡」、「三谷中原遺跡」の所在を確認し（香川県教育委員会編2000・2001・2002）、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して本発掘調査を行った（註1）。



第1図 調査地位置図

第2節 発掘作業と整理作業の経過

北野遺跡の発掘作業については平成13・15年度（1・2次調査）に、鎌野西遺跡の発掘作業については平成13～15年度（1～3次調査）に実施した。いずれも直営方式による発掘調査である。第1表は各年度の調査期間や面積などを一覧表にしたものである。

平成23年度に、県教育委員会と県土木部道路課との間で、本発掘調査から長期間経過した県道関連遺跡の整理作業を実施することとなった（森下2019）。これを受けて、北野遺跡、鎌野西遺跡の整理作業を平成30年度に実施し、令和元年度に報告書を刊行した。

北野遺跡					
回数	年度	期間	面積 (㎡)	地区名	担当者
1次	平成13年度	2001年4月～9月	3020	1区・2区・3区南・3区北	木下晴一・柏 徹哉・大塚純司
2次	平成15年度	2003年4月～7月	692	0区・3区東	西村尋文・細川健一・飯間俊行
			面積合計		
鎌野西遺跡					
回数	年度	期間	面積 (㎡)	地区名	担当者
1次	平成13年度	2001年5月～11月	1502	A区・B区	長井博志・川原和生・武井美和
2次	平成14年度	2002年4月～10月	1075	C区	森下友子・小林明弘・加納裕之
3次	平成15年度	2003年4月～7月	311	D区	西村尋文・細川健一・飯間俊行
			面積合計		

第1表 調査期間・面積・担当者一覧

香川県教育委員会事務局 文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	北原 和利	総括	所長	小原 克己
	課長補佐	小国 史郎		次長	川原 裕章
総務	副主幹	中村 禎伸	総務	参事	河野 浩征
	主査	須崎 陽子		副主幹	大西 誠治
	主事	亀田 幸一		係査	山本 和代
埋蔵文化財	副主幹	大山 真充	調査	参事	梅木 正信
	主任	西岡 達哉		主任文化財専門員	廣瀬 常雄
	文化財専門員	古野 徳久		主任文化財専門員	藤好 史郎
	文化財専門員	宮崎 哲治		文化財専門員	柏 徹哉
				文化財専門員	木下 晴一
				主任技師	長井 博志
				文化財専門員	川原 和生
				調査技術員	武井 美和
				調査技術員	大塚 純司

平成13年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局 文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	北原 和利	総括	所長	小原 克己
芸術文化グループ	課長補佐	渡辺 勇人		次長	渡辺 明夫
	主任	香川 浩章	総務	副主幹	野保 昌弘
	主事	亀田 幸一		係長	多田 敏弘
文化財グループ	副主幹	大山 真充	調査	主任文化財専門員	藤好 史郎
	主任	片桐 孝浩		文化財専門員	森下 友子
	文化財専門員	古野 徳久		主任技師	小林 明弘
	文化財専門員	佐藤 竜馬		調査技術員	加納 裕之

平成14年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局 文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	北原 和利	総括	所長	中村 仁
	課長補佐	森岡 修		次長	渡辺 明夫
総務・芸術文化グループ	主任	香川 浩章	総務	参事	河野 浩征
	主査	須崎 陽子		副主幹	野保 昌弘
	主任主事	八木 秀憲		係長	多田 敏弘
文化財グループ	副主幹	大山 眞充		主査	塩崎 かおり
	主任	片桐 孝浩		主査	田中 千晶
	文化財専門員	佐藤 竜馬	調査係	主任技文化財専門員	藤好 史郎
	主任技師	松本 和彦		主任技文化財専門員	西村 尋文
				主任技師	細川 健一
				調査技術員	飯野 俊之

平成 15 年度発掘調査体制一覧

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	白井 道代	総括	所長	西岡 達哉
	副課長	片桐 孝浩		次長	時松 弘志
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	中川 聡朗	総務	課長	時松 弘志
	主事	山下 詩織		副主幹	斎藤 政好
文化財グループ	課長補佐(兼務)	片桐 孝浩		主任	高橋 範行
	主任文化財専門員	信里 芳紀		主任	丸尾 麻知子
	主任技師	真鍋 貴匡		主任	木村 義信
				主任	横井 隆史
			資料普及課	課長	古野 徳久
				主任文化財専門員	山下 平重
				主任文化財専門員	乗松 真也

平成 30 年度整理体制一覧

註

1 森下(2019)の一部を加筆修正した。

参考文献

香川県教育委員会編 2000 『埋蔵文化財試掘調査報告XⅢ 香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会
 香川県教育委員会編 2001 『埋蔵文化財試掘調査報告XⅣ 香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会
 香川県教育委員会編 2002 『埋蔵文化財試掘調査報告XⅤ 香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会
 森下英治 2019 「調査に至る経緯と経過」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 三谷中原遺跡』香川県教育委員会 ,p.1

第2章 遺跡の位置と環境

北野遺跡、鎌野西遺跡は、高松平野の南西部、春日川左岸の自然堤防上に立地する。現在の行政地名は香川県高松市三谷町である。詳細な地理的環境については、南北に近接する上林遺跡（蔵本 2019,pp.4-8）、三谷中原遺跡（森下 2019,pp.2-3）の発掘調査報告書を参照されたい。以下、近年の調査成果を中心に歴史的環境について述べる。

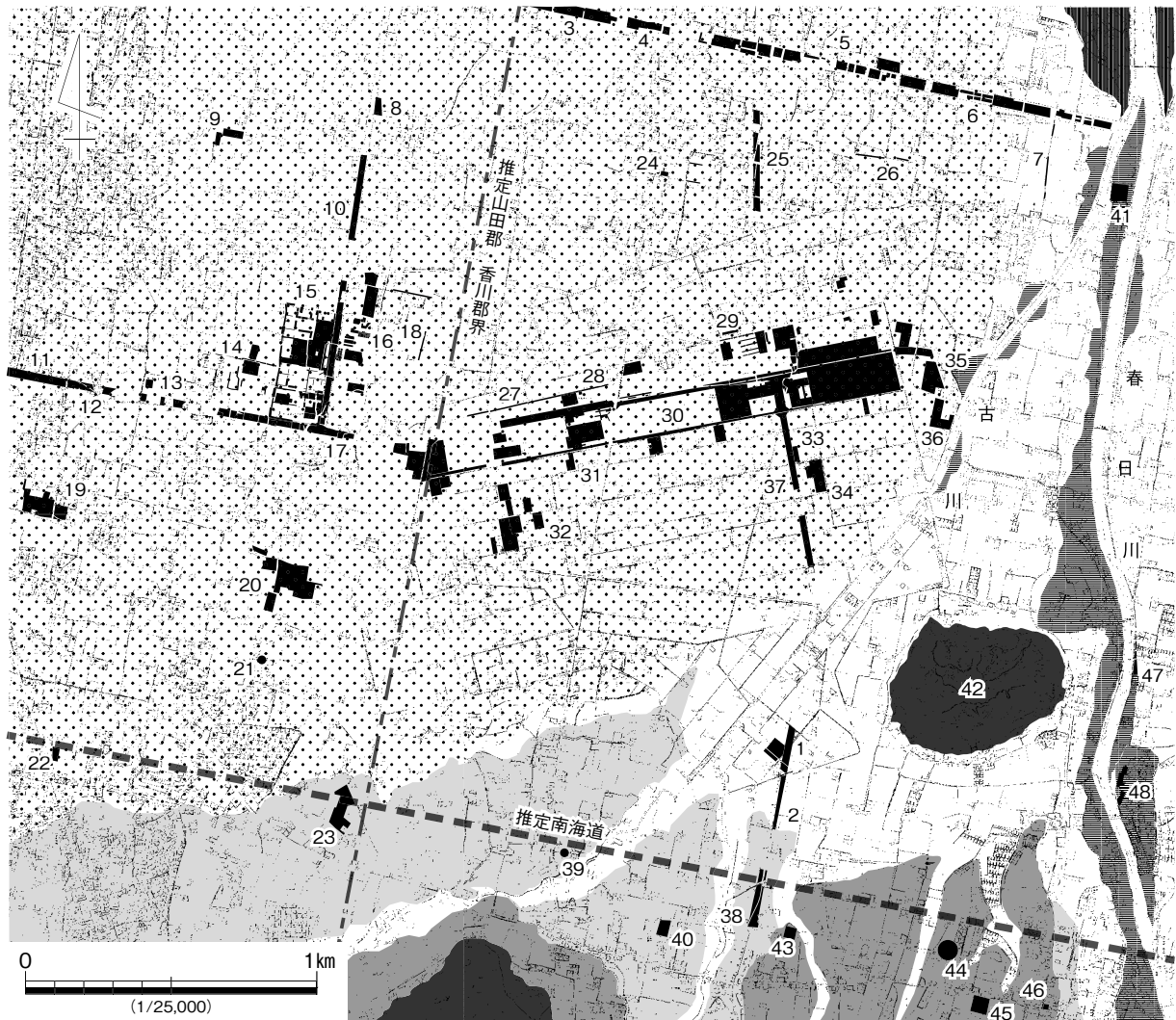
旧石器時代では、南方の日山から伸びる段丘上の横内東遺跡で五色台産サヌカイト製とみられるナイフ形石器が出土している。縄文時代晩期後半の遺物は本遺跡群から北西方向約2kmに位置する多肥宮尻遺跡の自然河川で確認されている。本遺跡群から北方約2.5kmにある林・坊城遺跡の自然河川では、晩期後半の突帯文土器に一木鋤や打製石斧といった農耕にかかわる遺物が伴う。

弥生時代前期には本遺跡群から北西約3kmの汲仏遺跡で環濠集落が出現する。このほか、高松平野での環濠集落は本津川下流左岸の鬼無藤井遺跡、旧香東川下流域の天満・宮西遺跡でも認められる。汲仏遺跡、天満・宮西遺跡の環濠集落は前期前半に出現し、前期後半まで継続する。鬼無藤井遺跡の環濠集落の時期は前期後半である。高松平野では弥生時代前期の遺物を伴う遺跡の確認例は増加しているが、環濠集落を除けば、居住の遺構の分布は不鮮明である。近年調査された香東川中流右岸の北口遺跡（前期後半）では、平面形円形で窪みもち、内部に柱穴とみられる遺構が複数確認されている。さぬき市の鴨部・川田遺跡でも類似する遺構が検出されており、こうした遺構が典型的な竪穴建物の構造を伴わない居住遺構の可能性はある。北口遺跡は、当該期の掘立柱建物数棟も配置されることから、高松平野での環濠集落以外の居住域とみていいだろう。明瞭な畦畔を備える水田は、本遺跡群から約2.5km北西のさこ・長池遺跡からさこ・長池Ⅱ遺跡にかけて2単位確認されている。いずれも前期後半で、等高線に直交する幹線小畦畔に沿って長方形に近い区画が並ぶ。さらに北方に位置する前期前半とみられる上西原遺跡の水田も同様の区画形状をとっている。さこ・長池、さこ・長池Ⅱ遺跡の水田は微高地上に形成され、排水先である自然河川に近接する。縄文時代晩期後半の自然河川はこの時期にも活発に活動しているとみられ、高松平野ではこうした自然河川を利用した排水計画のもとに水田が営まれた可能性がある。

弥生時代中期中葉には平野全体に遺跡が点在する。本遺跡群から約2km北西に位置する多肥松林遺跡では、微高地間の自然河川から出土した未成品を含む多量の木器から、集落内での木器製作が推測されている。また、以前は不明瞭であった中期の墓域は、太田原高州遺跡の発掘調査により事例の一つが明らかとなった。太田原高州遺跡では中期末に平面形方形の区画墓群が構築され、一部の主体部には副葬品と考えられる玉が伴う。このうち、水晶製算盤玉は日本海沿岸の丹後半島産とみられている。

弥生時代後期にはさらに遺跡数が増加する。この時期の高松平野では細粒かつ多量の角閃石を含む胎土と精緻な器形を特徴とする香東川下流域産土器が成立する。香東川下流域産土器製作地の中心は、香東川流域の石清尾山南側一帯とされている。一方、集落とともに粘土採掘坑が検出された空港跡地遺跡では、明橙色～橙白色の胎土で、香東川下流域産土器とは異なる器形の白色系土器の製作が推測されている。このほかにも平野東端丘陵部付近などを推定製作地とする土器など、この時期の高松平野では複数の土器群の存在が明らかとなりつつある。また、林・坊城遺跡では、平面形円形の周溝墓3基が近接して築かれている。

古墳時代前期前半には、主体部などの状況は不明ながらも、空港跡地遺跡で前方後円形、前方後方形の周溝墓が確認されている。古墳時代中期初頭の築造とされる三谷石舟古墳は墳丘長約80mの前方後円墳で、同時期の前方後円墳としては香川県内最大規模である。高松平野西部の鷲ノ山で産出する角閃石安山岩を用いた刳拔式石棺を埋葬施設とする。墳丘直径40mと推定される円墳の高野丸山古墳は中期の築造と考えられている。空港跡地遺跡では5世紀末の竈を伴う竪穴建物が検出されているが、この直後の時期の竈をもつ竪穴建物はわずかである。7世紀前葉～中葉には、多肥北原遺跡や多肥北原西遺跡、大下遺跡など、高松平野中央部で竪穴建物が密集する集落が形成される。これらの竪穴建物は基本的に竈を備えており、当該期を高松平野での竈の普及期とすれば、竈が広く普及するまでには時間を要

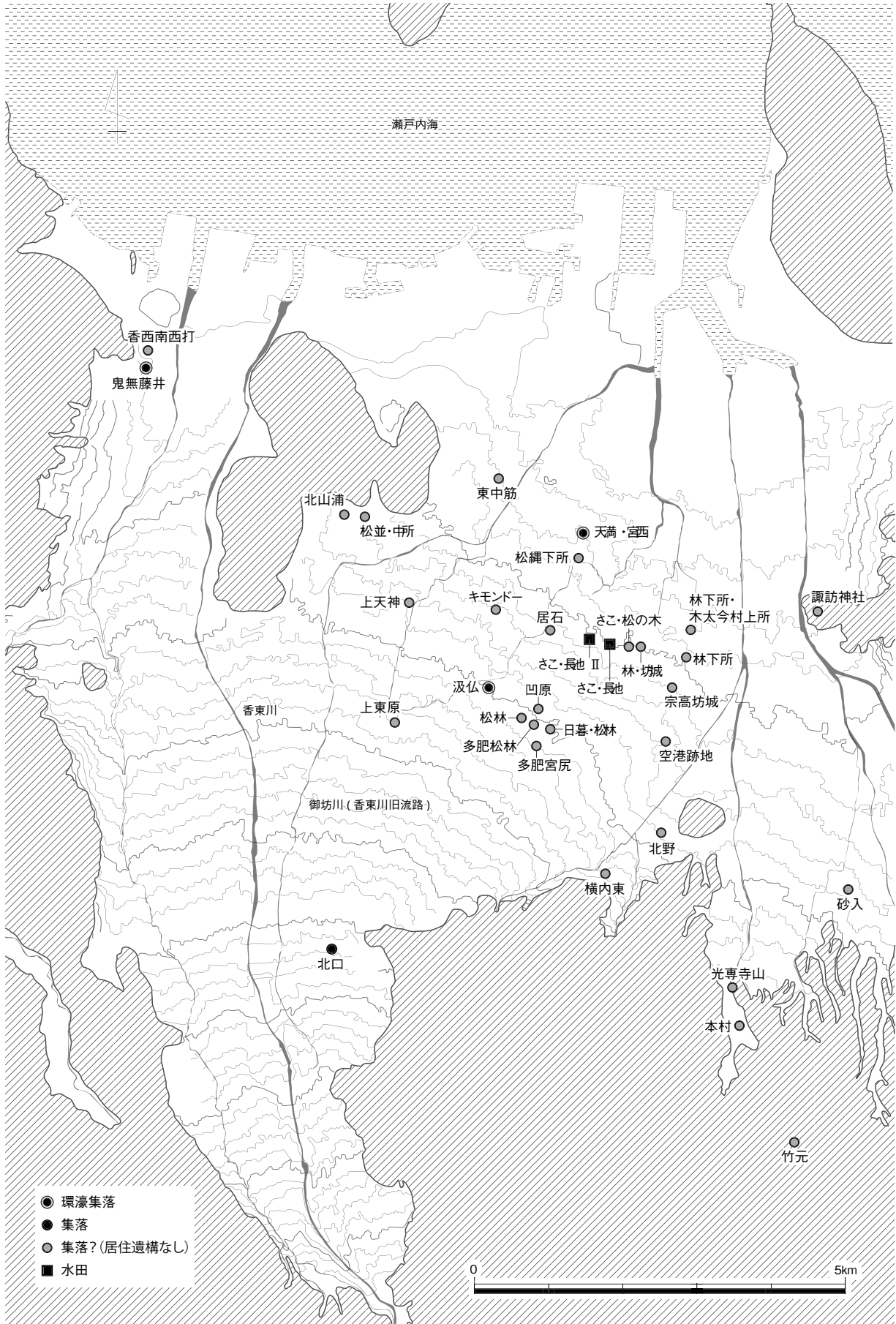


三角州帯
 自然堤防帯
 扇状地帯
 段丘Ⅱ
 段丘Ⅲ
 丘陵
 旧河道

- 1. 北野遺跡 2. 鎌野西遺跡 3. さこ・長池遺跡 4. さこ・松ノ木遺跡 5. 林・坊城遺跡 6. 六条・上所遺跡 7. 六条上川西遺跡
- 8. 多肥下町下所遺跡 9. 汲仏遺跡 10. 凹原遺跡 11. 多肥北原西遺跡 12. 多肥北原遺跡 13. 多肥平塚遺跡 14. 松林遺跡 15. 多肥松林遺跡
- 16. 日暮・松林遺跡 17. 多肥宮尻遺跡 18. 池の内遺跡 19. 西久保遺跡 20. 野郷遺跡 21. 天満宮古墳 22. 横市遺跡 23. 彦作遺跡 24. 林宗高遺跡
- 25. 宗高坊城遺跡 26. 六条西村遺跡 27. 宮西・一角遺跡 28. 一角遺跡 29. 公務員宿舎遺跡 30. 空港跡地遺跡 31. 上林本村遺跡 32. 拝師廃寺
- 33. 中林遺跡 34. 竹部遺跡 35. 六条下所遺跡 36. 六条上青木遺跡 37. 上林遺跡 38. 三谷中原遺跡 39. 加摩羅神社古墳 40. 横内東遺跡
- 41. 六条城跡 42. 由良山城跡 43. 鎌野城跡 44. 高野丸山古墳 45. 高野廃寺 46. 川島本町山田遺跡 47. 大瀬遺跡 48. 由良南原遺跡

(高松市都市計画図「太田」・「林」・「仏生山」・「三谷」に一部加筆)

第2図 周辺遺跡位置図



第3図 高松平野における弥生時代前期後半の遺跡

したことになる。

古代讃岐国の山田郡11郷のうちのひとつである三谷郷は、近世の三谷村の範囲にほぼ相当する。高松平野にはN⁹°～11°E方向の条里地割が広がり、春日川及び古川左岸の自然堤防帯や扇状地帯にも認められる。三谷中原遺跡では8世紀前半以前の条里方向の溝が、空港跡地遺跡でも8世紀の条里方向に合致する溝が確認されており、当該地域では条里施工は8世紀までには行われたようだ。官道である南海道の推定路線は、讃岐国内を阿波国境から伊予国境までほぼ東西に横断する。条里地割が展開する平野では歴史地理学的手法により余剰帯が見いだされ、この余剰帯が南海道の痕跡と推定された。高松平野南部では南海道の路線がほぼ直線に復元され、その推定路線が三谷郷北部を通過する。讃岐国内の南海道沿いには6の駅家が設置され、このうちのひとつである三谿駅家の位置は、地名から三谷郷内に求められる。南海道推定路線内にある三谷中原遺跡では、L字状に屈曲する溝が2本検出された。2本の溝の南北軸が揃うにもかかわらず、それぞれの溝は北から西へ、南から東へと屈曲し、間に13mの空閑地を設ける。この空閑地に南海道の路盤の存在が推定されている。隣接する香川郡では、南海道が起点と考えられる幅員9mの南北方向の道路と、それに直交する幅員6mの東西方向の道路が検出されている（多肥北原西遺跡、太田原高州遺跡）。東西方向の道路は延長約1kmに達し、多肥廃寺の近傍を通過する。

北野遺跡、鎌野西遺跡の所在地は、近世～近代初頭の三谷村の範囲に含まれる。三谷村は、町村制施行後の1890年（明治23）には隣接する高野村の一部を取り込み、1956年（昭和31）に高松市と合併して高松市三谷町となった。

参考文献

蔵本晋司 2019「立地と環境」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 上林遺跡』,pp.4-12

森下英治 2019「遺跡の立地と環境」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 三谷中原遺跡』香川県教育委員会,pp.2-7

第3章 北野遺跡の調査成果

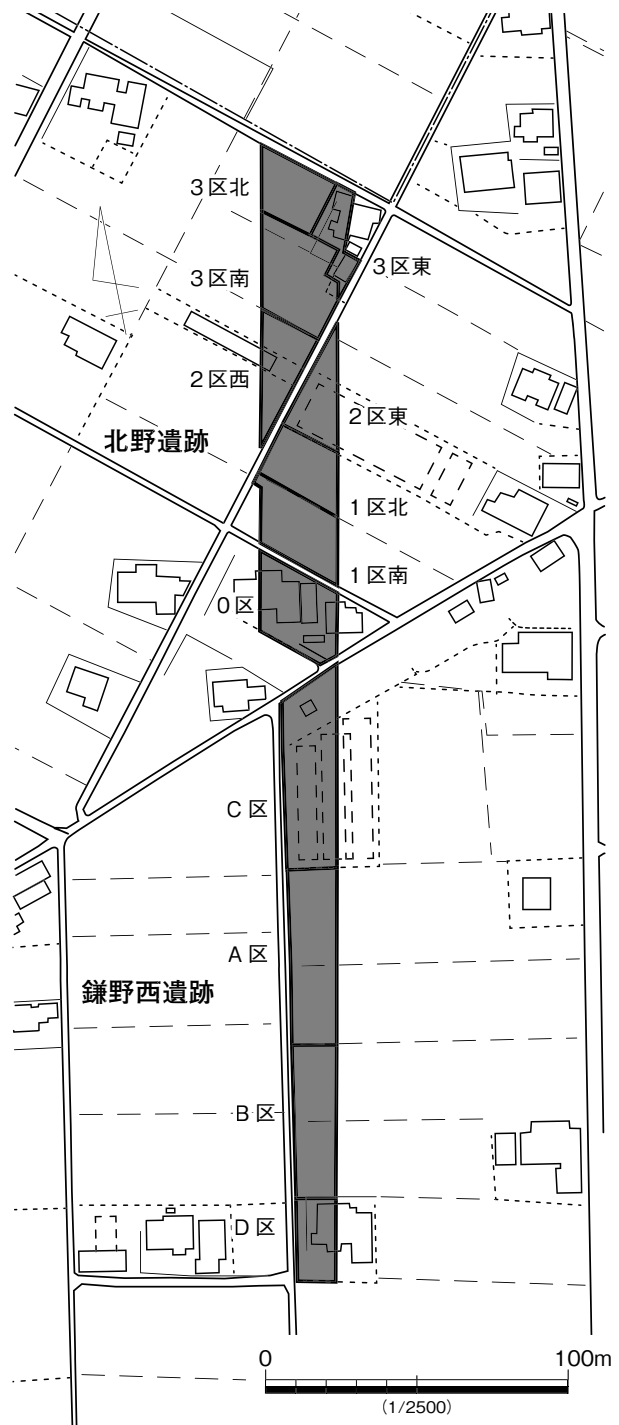
第1節 調査の方法

北野遺跡と鎌野西遺跡は近接し、北に位置するのが北野遺跡、南が鎌野西遺跡である。調査地はともに南北に長く、その調査地内を市道や水路が横断するため、発掘調査時の土地区画に応じて調査区を設定した。北野遺跡の調査区名は、北から3区北、3区東、3区南、2区西、2区東、1区北、1区南、0区とした。北野遺跡の発掘調査面積は3,712㎡である。

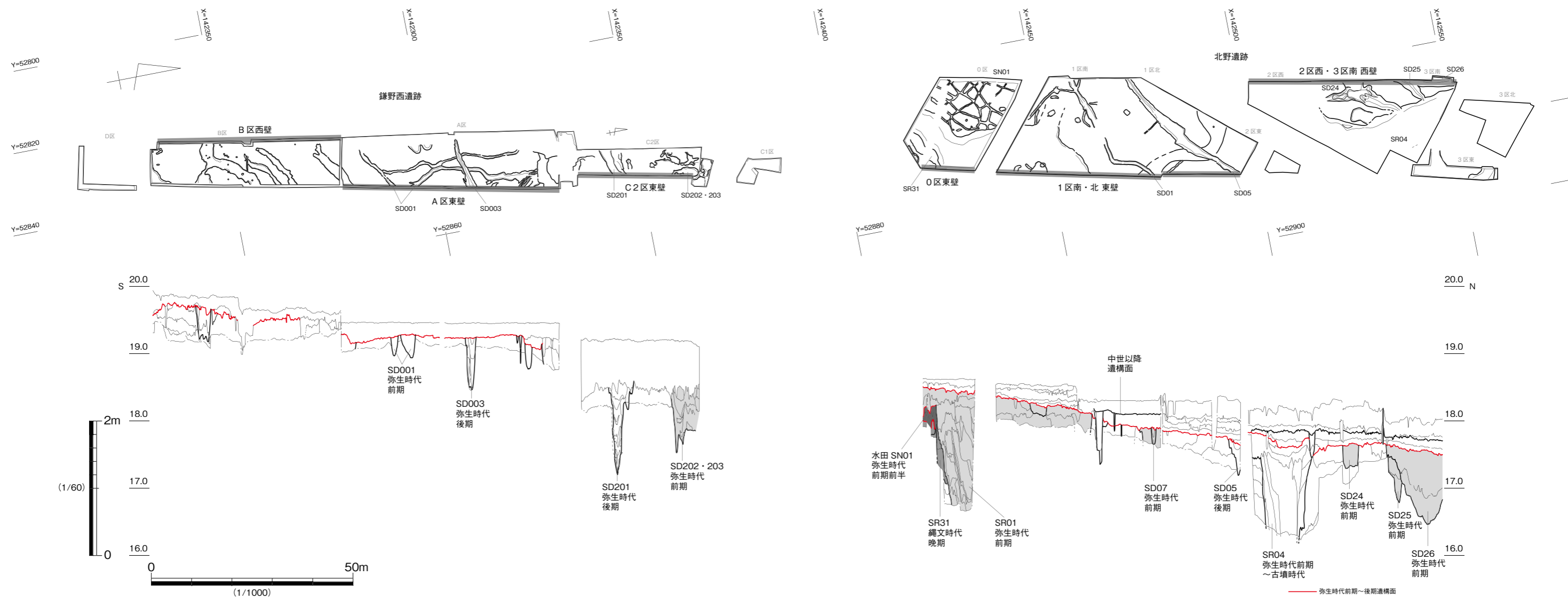
発掘調査は平成13年度（2001年）、平成15年度（2003年）に直営方式で実施した。耕作土や包含層は基本的には重機で掘削し、遺構は人力によって掘削した。遺物の少ない一部の自然河川や溝については部分的な掘り下げで調査を終わらせた。

第2節 基本層序

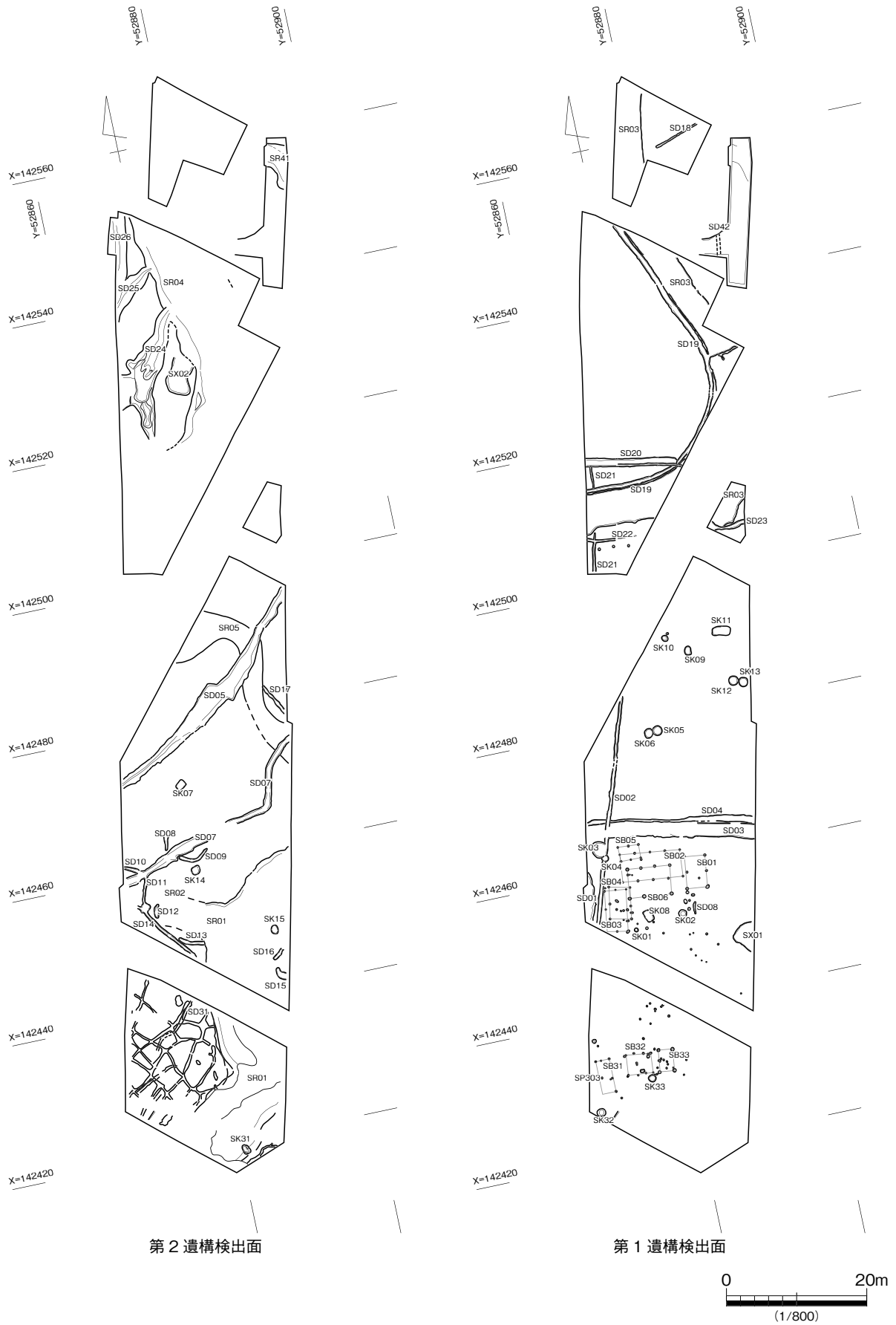
北野遺跡、鎌野西遺跡周辺の現地表面は、おおむね南東から北西にかけて傾斜する。南北に細長い両遺跡の調査区壁断面図でも、弥生時代遺構面の標高は南から北にかけて少しずつ下がっている。両遺跡の遺構形成以前の基盤層には黄褐色系シルト層が一部に認められるものの、大半は細砂～粗砂層で構成され、安定した堆積状況を示していない。北野遺跡 SR01 の自然科学分析報告（第5章第2節）では、縄文時代晩期の SR01 河道3に先行する川幅の大きな自然河川の存在が明らかになった。調査地全体に広がる細砂～粗砂を中心とした層は、SR01 下位の自然河川と同様、人間活動以前の自然河川と推測される。この自然河川が埋没した後に遺構が形成されている。



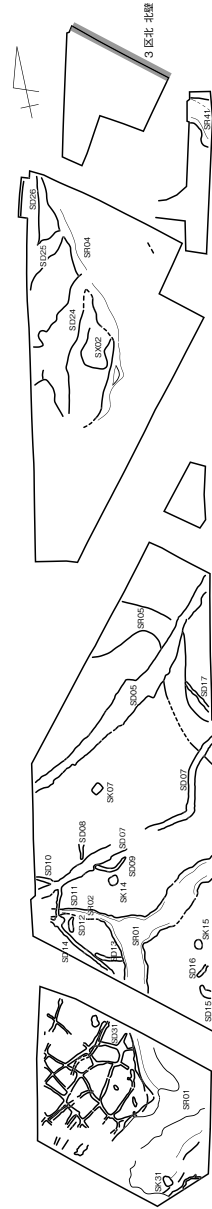
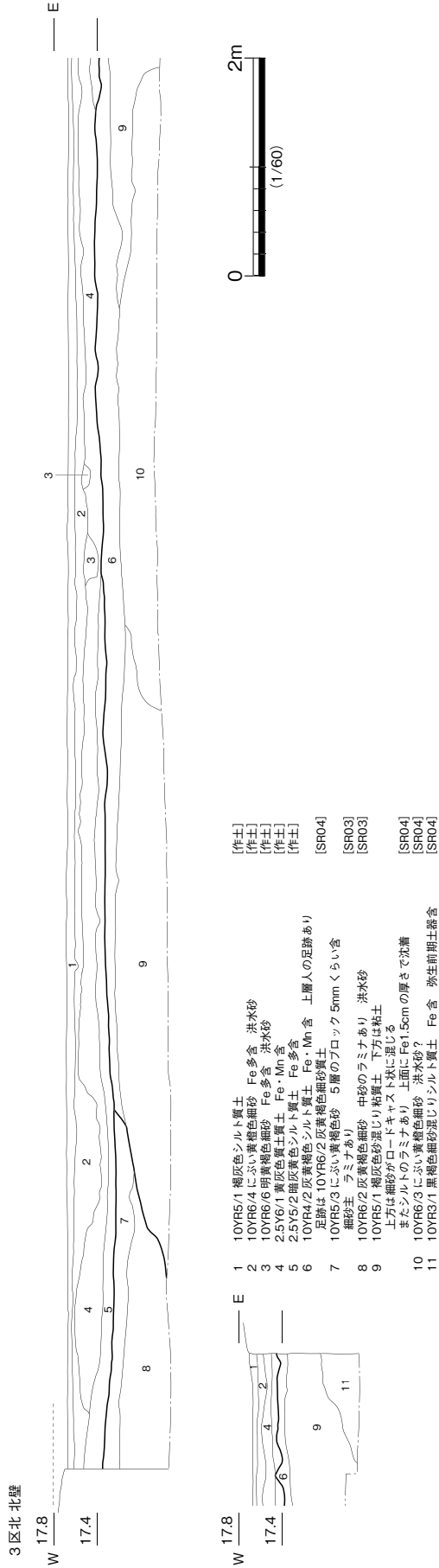
第4図 北野遺跡・鎌野西遺跡 調査区割図



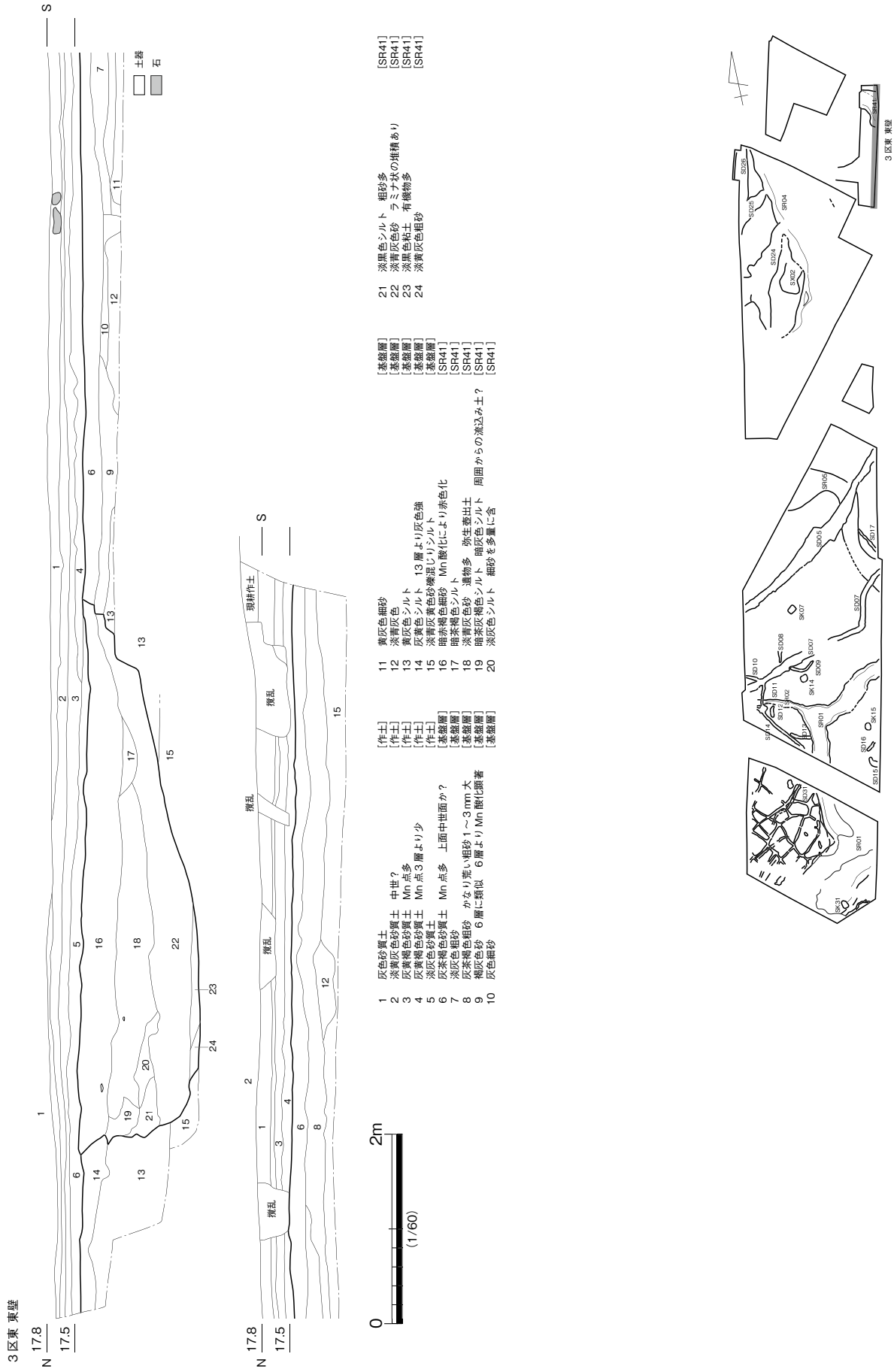
第5図 北野遺跡・鎌野西遺跡 断面図



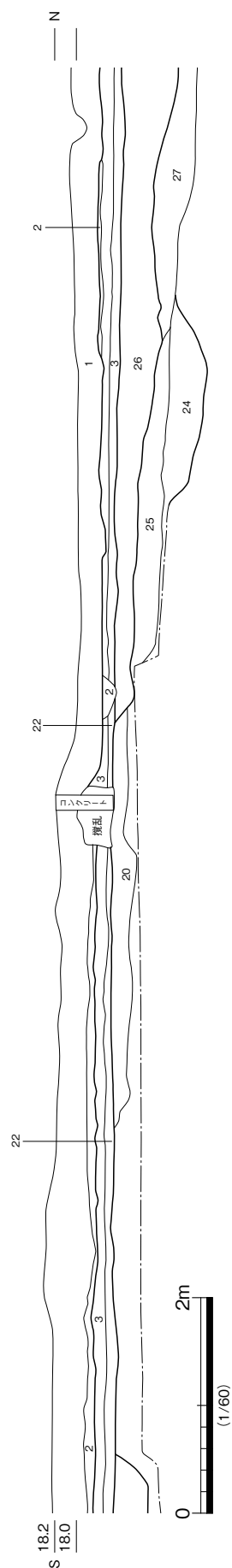
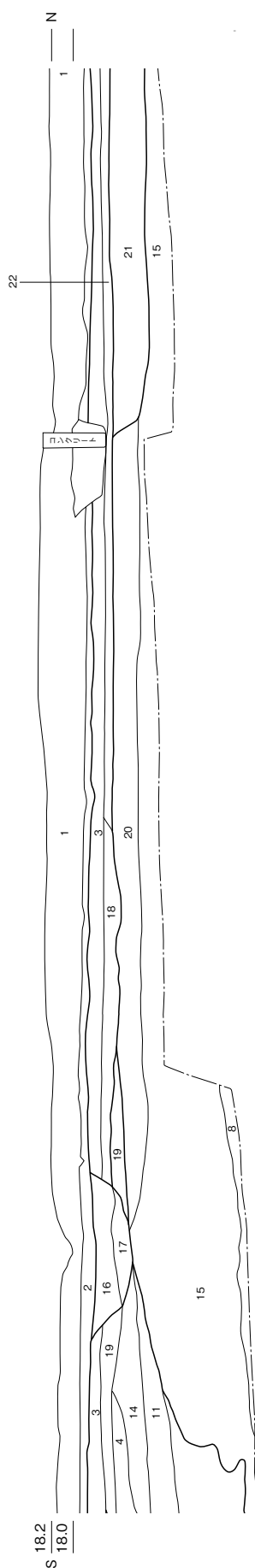
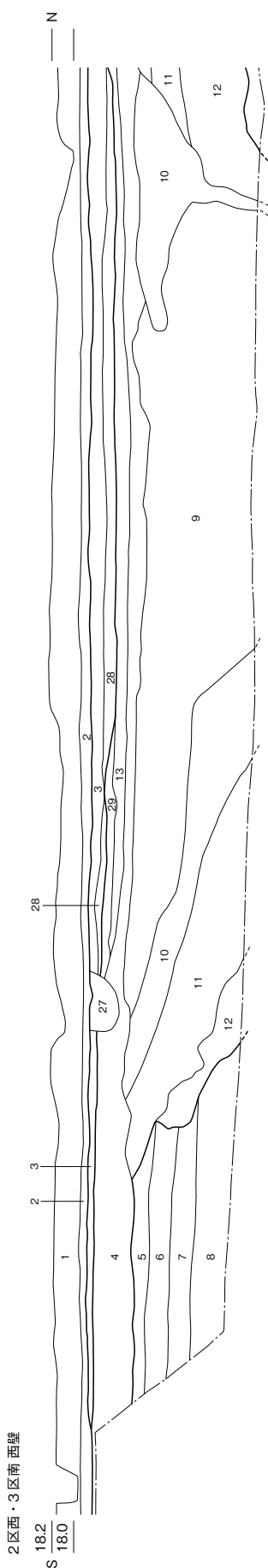
第6図 遺構配置図



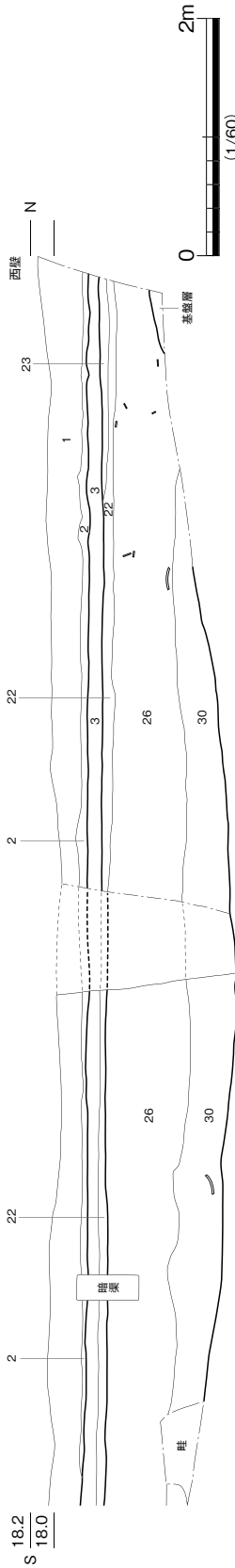
第7図 3区北北壁断面図



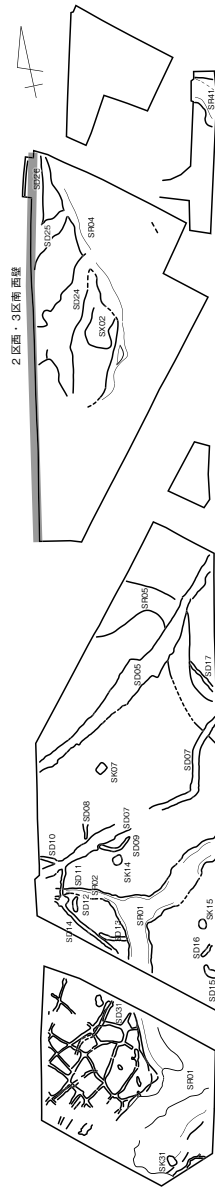
第8図 3区東 東壁断面図



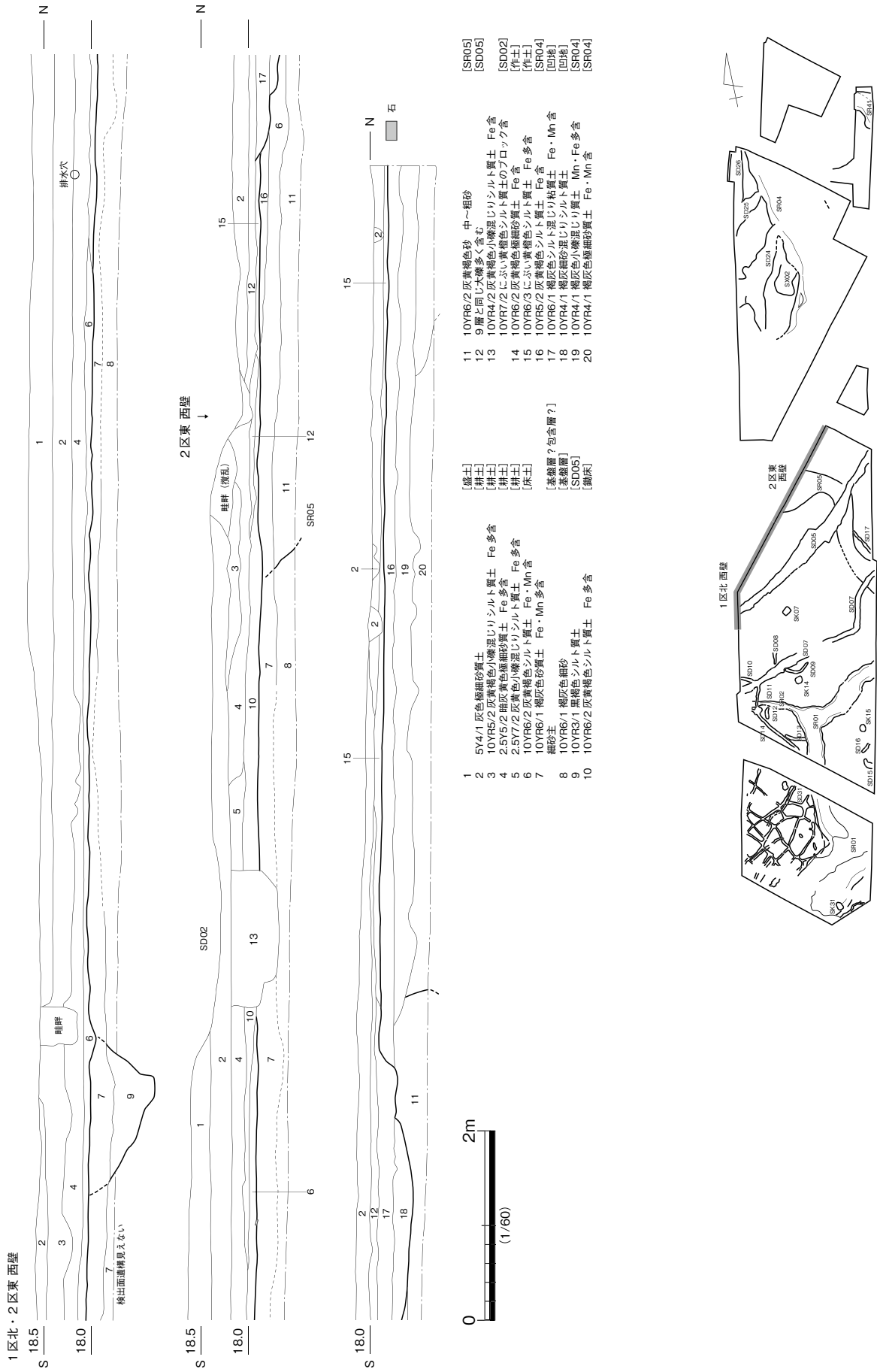
2区西・3区南西壁



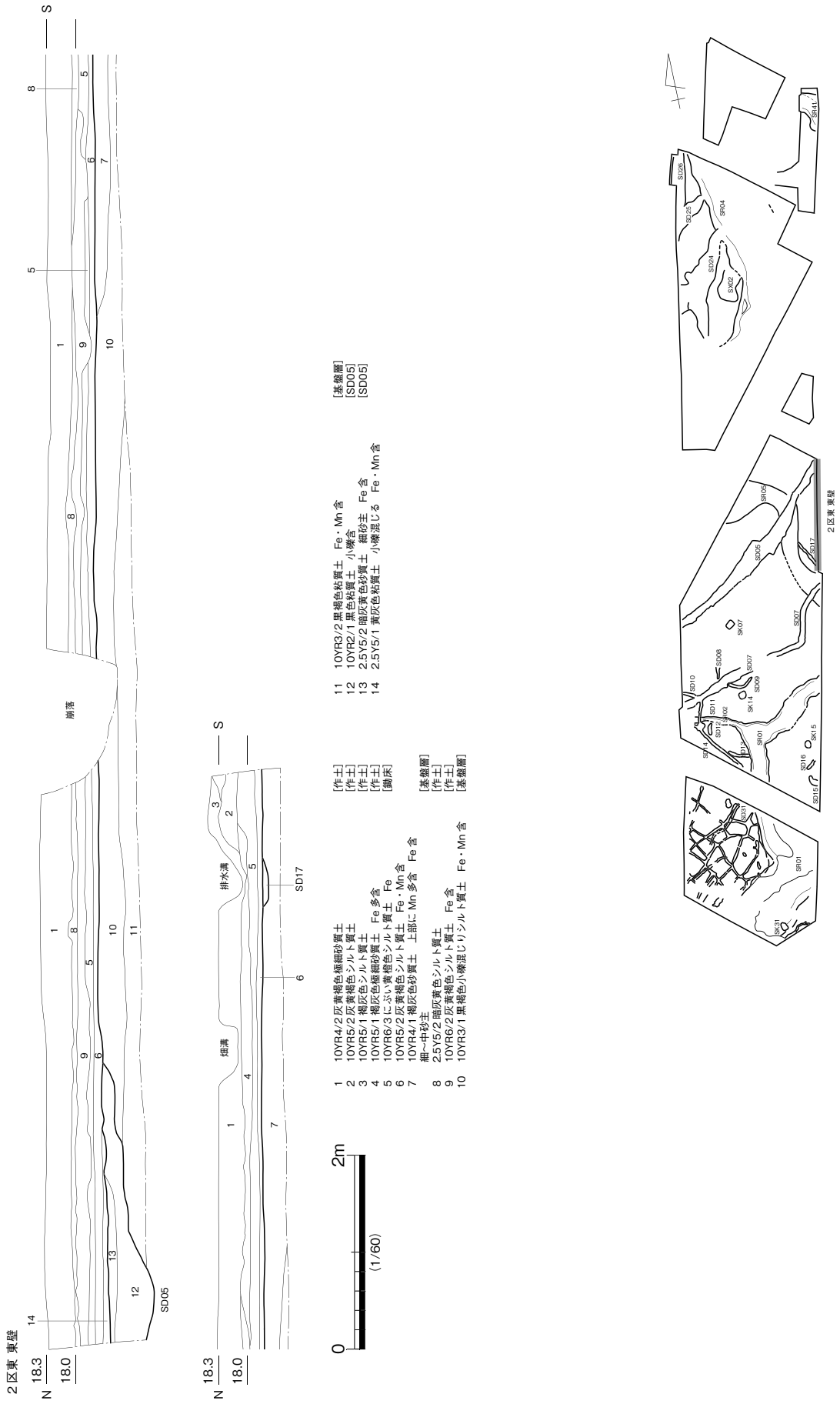
- | | | | |
|---|--|--|---|
| <p>1 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト質土
2 2.5Y5/2 明黄灰色極細砂質土 Fe 多含
3 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質土 Fe 含
4 2.5Y5/2 明黄灰色シルト質土 Fe・Mn 含
5 2.5Y5/1 黄灰色砂混じり粘質土 Fe 含
6 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂質土 小礫含 Fe・Mn 多含
7 10YR5/1 黄灰色極細砂質土 樹根状の Fe 上部小礫多
8 5B6/1 青灰色粘土 ハガネ土
9 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 南方及び上方は細～中砂
以外は中～粗砂主 ラミナあり
10 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 細砂含 木質含
11 2.5Y5/1 黄灰色砂 細砂主 中砂・粗砂のラミナ
12 2.5Y3/1 黒褐色砂混じり粘土 木質炭灰
13 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト質土 Fe 多含
14 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質土 Fe・Mn 含
細砂主 小礫混じる
15 2.5Y6/2 灰黄色砂 中～粗砂主</p> | <p>[作土]
[包含層]
[SR04]
[基盤層]
[基盤層]
[基盤層]
[SR04]
[SR04]
[SR04]
[SR04]
[SR04]
[SR04]
[SR04]
[SR04]</p> | <p>16 10YR7/1 灰白色小礫混じり極細砂質土 Fe・Mn 含
17 N7 灰白色粘質土 ラミナ状に細・中砂あり
18 10YR8/2 灰白極細砂
19 10YR7/1 灰白色極細砂質土 Fe 含
20 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土
21 10YR2/2 黒褐色小礫混じりシルト質土 上部を主にMn粒・Fe 含
22 10YR6/1 褐灰色小礫混じりシルト質土 Fe・Mn 含
23 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土
24 10YR3/2 黒褐色粘土混じり砂 細砂～小礫
粘土入り隙密 遺物ほとんどなし
25 10YR3/1 黒褐色小礫混じり粘質土 小礫多含
26 10YR4/2 灰黄褐色砂混じりシルト質土 Mn 含 遺物多含
27 10YR3/1 黒褐色粘質土
28 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質土 Fe 多含
29 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土 Fe・Mn 含
30</p> | <p>[SD20]
[包含層]
[SR04]
[基盤層]
[SD24]
[包含層]
[包含層]
[SD25]
[SD25]
[SD26]
[SD26]
[包含層]
[SR04]
[SD26]</p> |
|---|--|--|---|



第9図 2区西・3区南西壁断面図

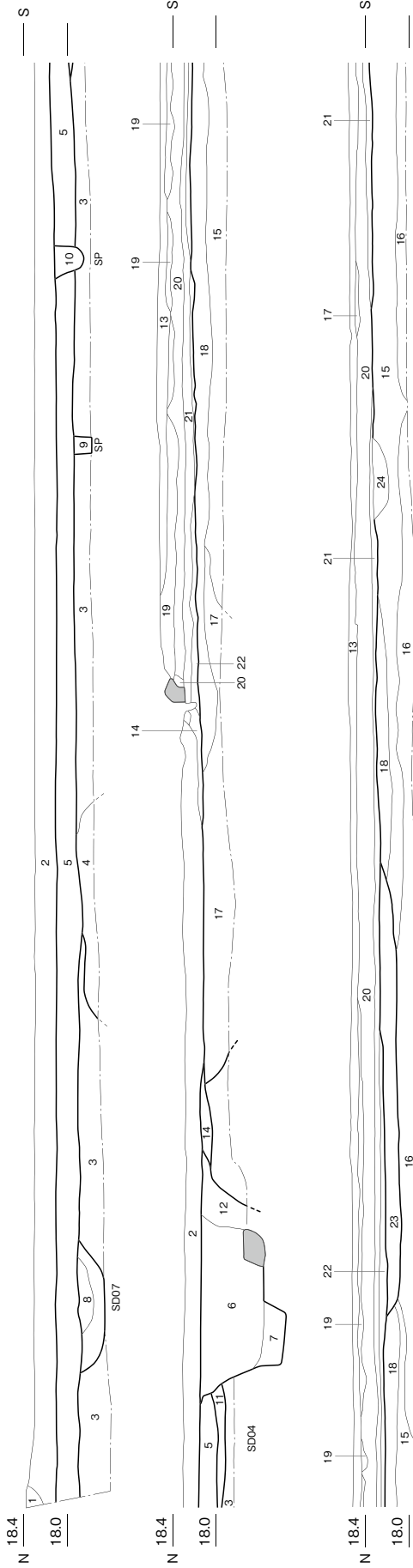


第10図 1区北・2区東 西壁断面図

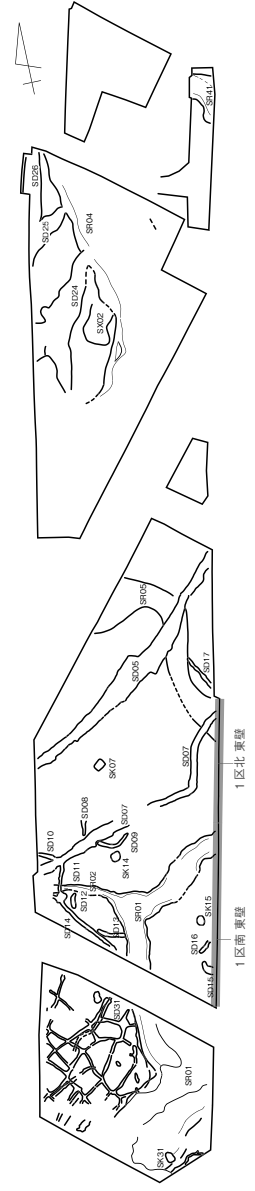
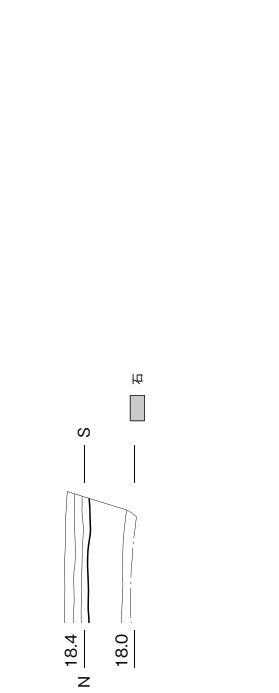


第11図 2区東壁断面図

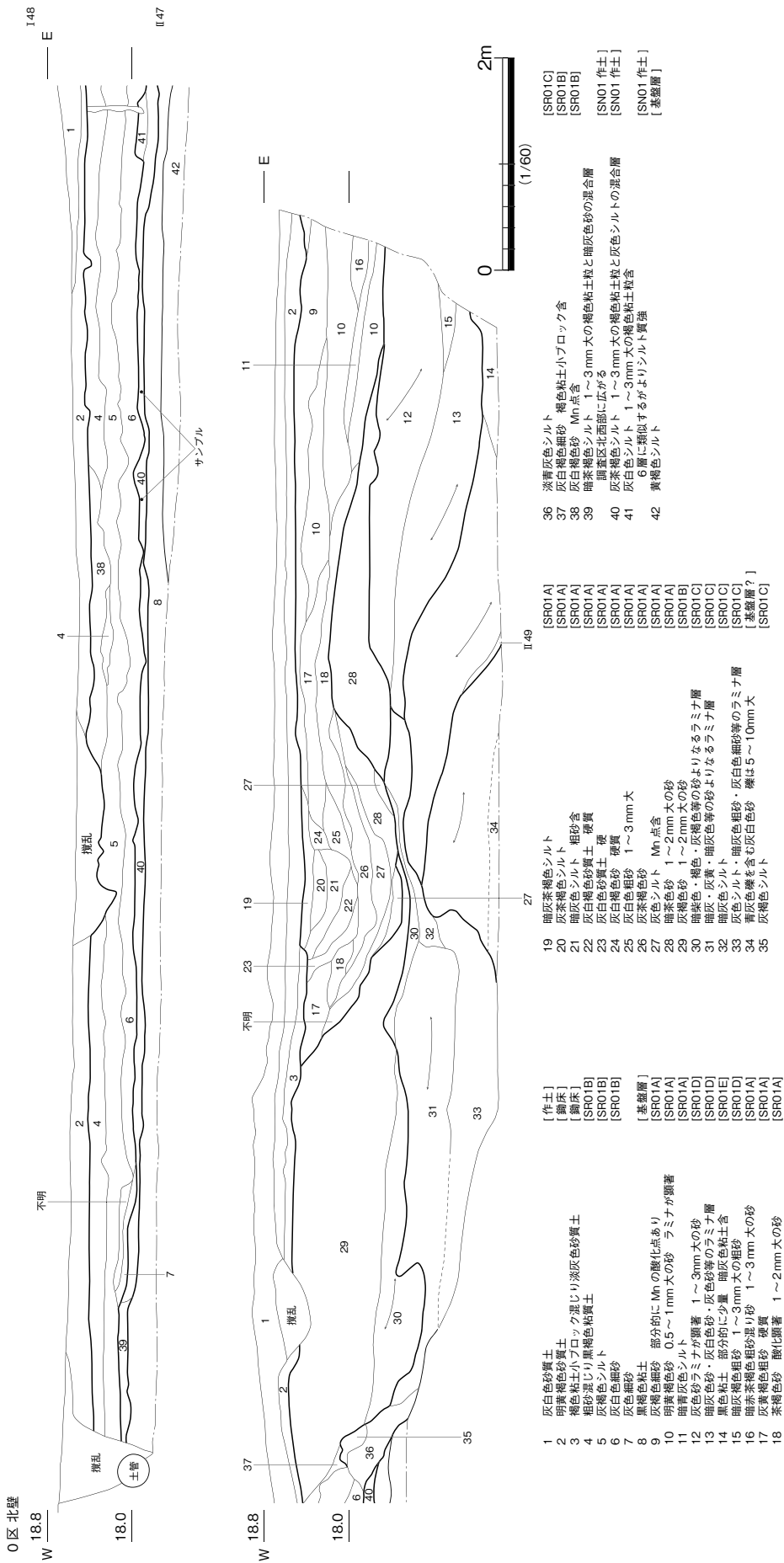
1区北・1区南東壁



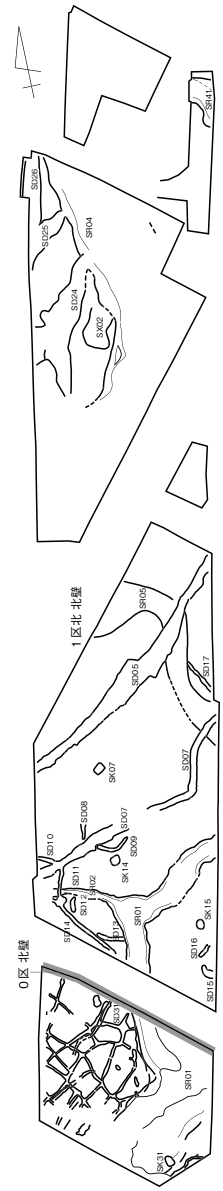
- | | | | | |
|------|--|----|-------------------------------|------------|
| 1区東壁 | [耕作土] | 14 | 10YR5/2 灰青褐色細砂質土 Fe多含 | [SR01] |
| 1 | 10YR5/3 土いり黄褐色シルト質土 Fe多含 | 15 | 10YR4/1 褐色シルト質土 Fe・Mn含 | [SR01] |
| 2 | 10YR6/2 灰青褐色シルト質土 水田耕土 | 16 | 10YR3/1 黄褐色小礫混じりシルト質土 Fe・Mn含 | [SR01] |
| 3 | 10YR2/2 黄褐色小礫混じりシルト質土 緻密 Mn粒 Fe含 | 17 | 10YR6/3 土いり黄緑砂 SR01埋土 | [SR01] |
| 4 | 10YR5/1 褐色砂 細～粗砂 | 18 | 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 Mn・Fe多含 | [SR01] |
| 5 | 10YR5/2 灰青褐色細砂質土 Fe含 | 19 | 10YR5/4 土いり黄褐色細砂質土 Fe多含 | [耕作土?] |
| 6 | 5Y5/1 灰黄色シルト混じり砂質土 シルト・小礫混じり土などが同層状に入る | 20 | 2.5Y6/3 土いり黄褐色細砂質土 Fe多含 | [耕作土?] |
| 7 | 5Y5/2 灰オリーブ色砂混じり粘質土 グライ化している | 21 | 10YR6/2 灰青褐色小礫混じりシルト質土 Fe・Mn含 | [耕作土?] |
| 8 | 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 細砂～粗砂 | 22 | 10YR4/1 褐色シルト質土 灰状にMn粒多含・Fe含 | [耕作土?] |
| 9 | 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 粘質土 | 23 | 10YR3/2 黄褐色シルト質土 Fe・Mn含 | [耕作土?] |
| 10 | 2層に中礫混入 | 24 | 埋土中に炭化物を含む | [耕作土に伴う暗渠] |
| 11 | 10YR6/4 土いり黄褐色中砂 | | | |
| 12 | 2.5Y7/1 灰白色シルト質土 10YR5/2 灰青褐色シルトがラミネ状に堆積 | | | |
| 13 | 2.5Y4/2 脚灰黄色シルト質土 中砂シルト・粘質土が同層状に入る | | | |



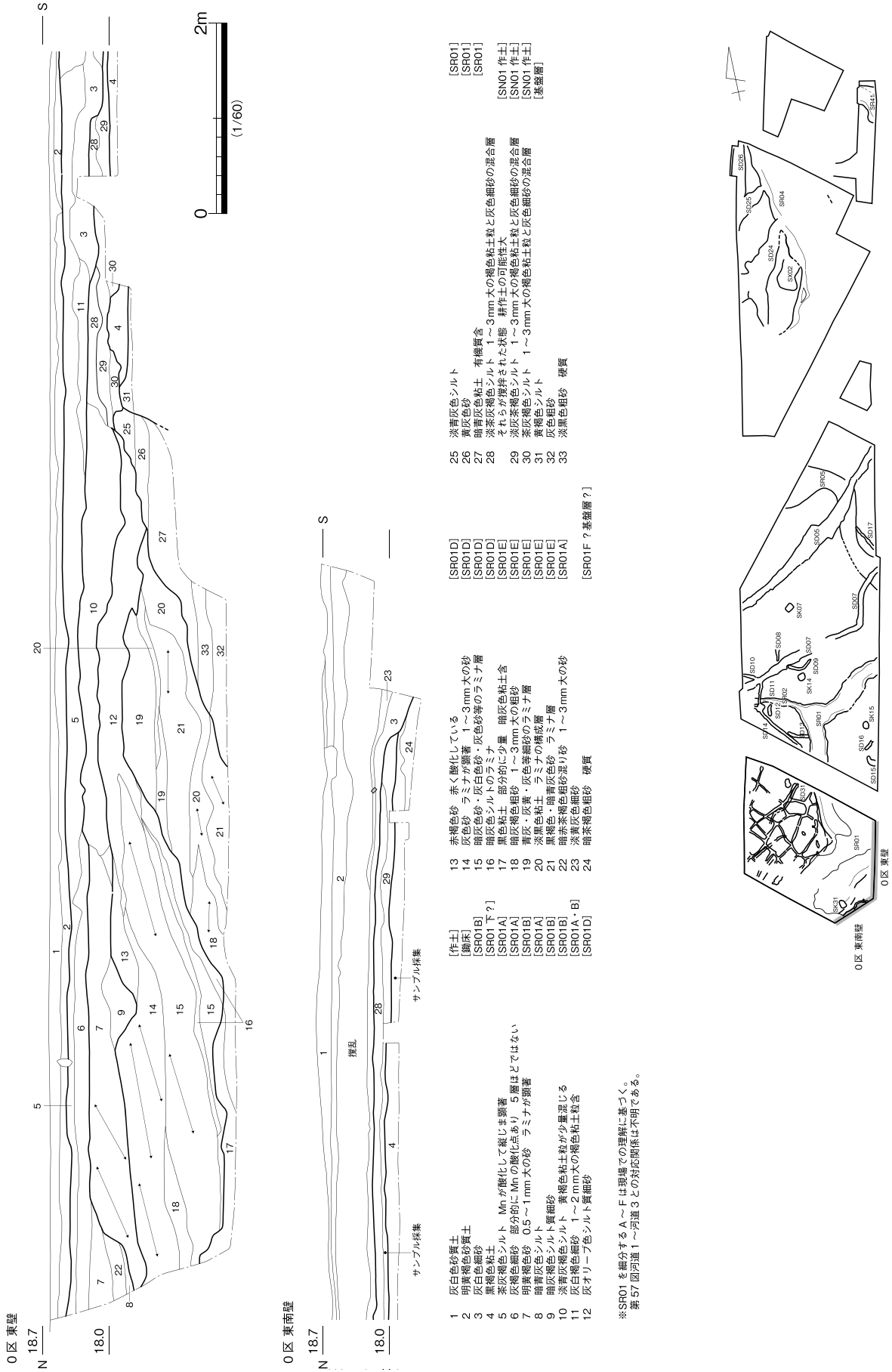
第12図 1区北・1区南東壁土層断面図



※SR01を細分するA~Eは現場での理解に基づく。
第57回河通1~河通3との対応関係は不明である。

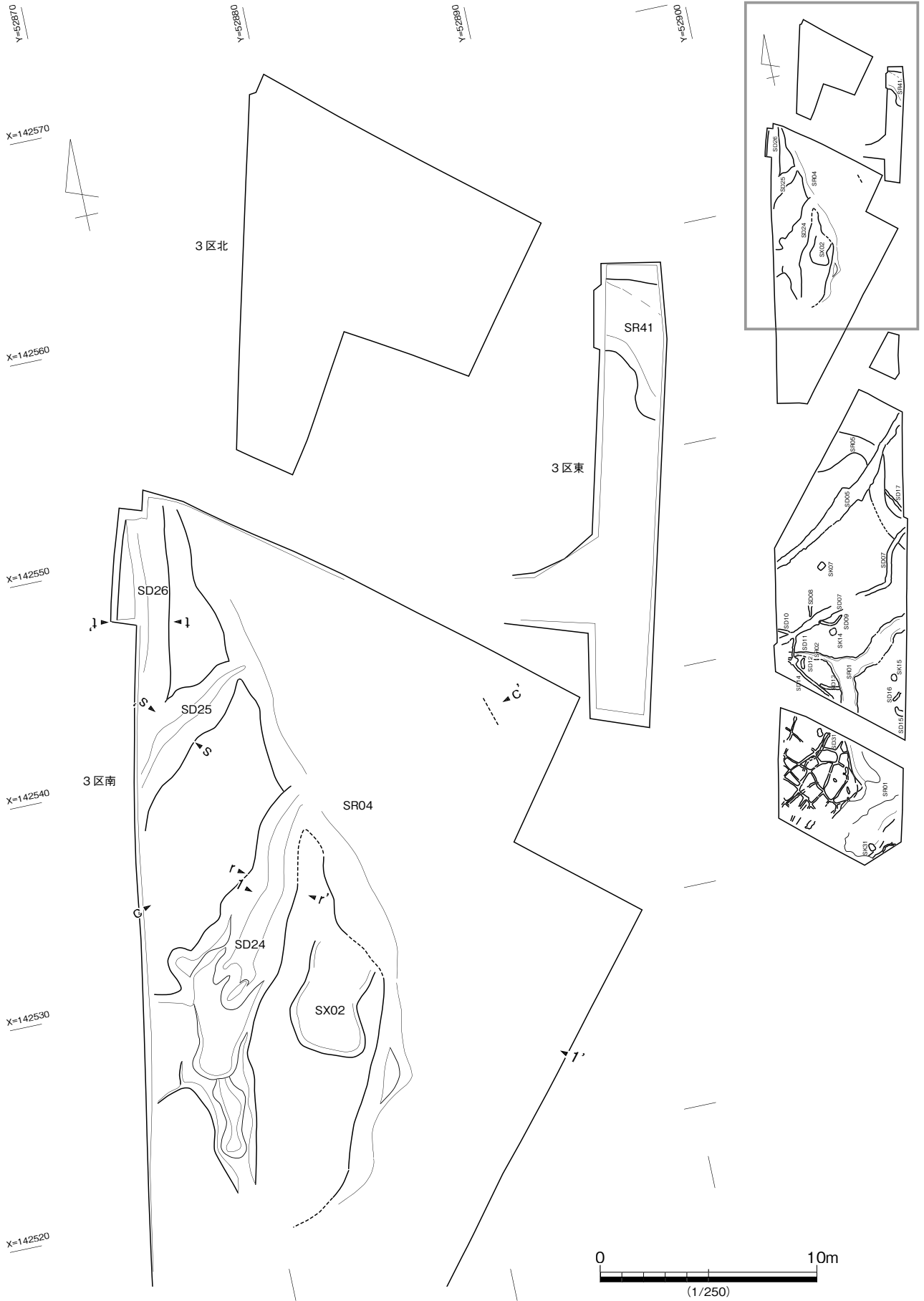


第13図 0区北壁断面図

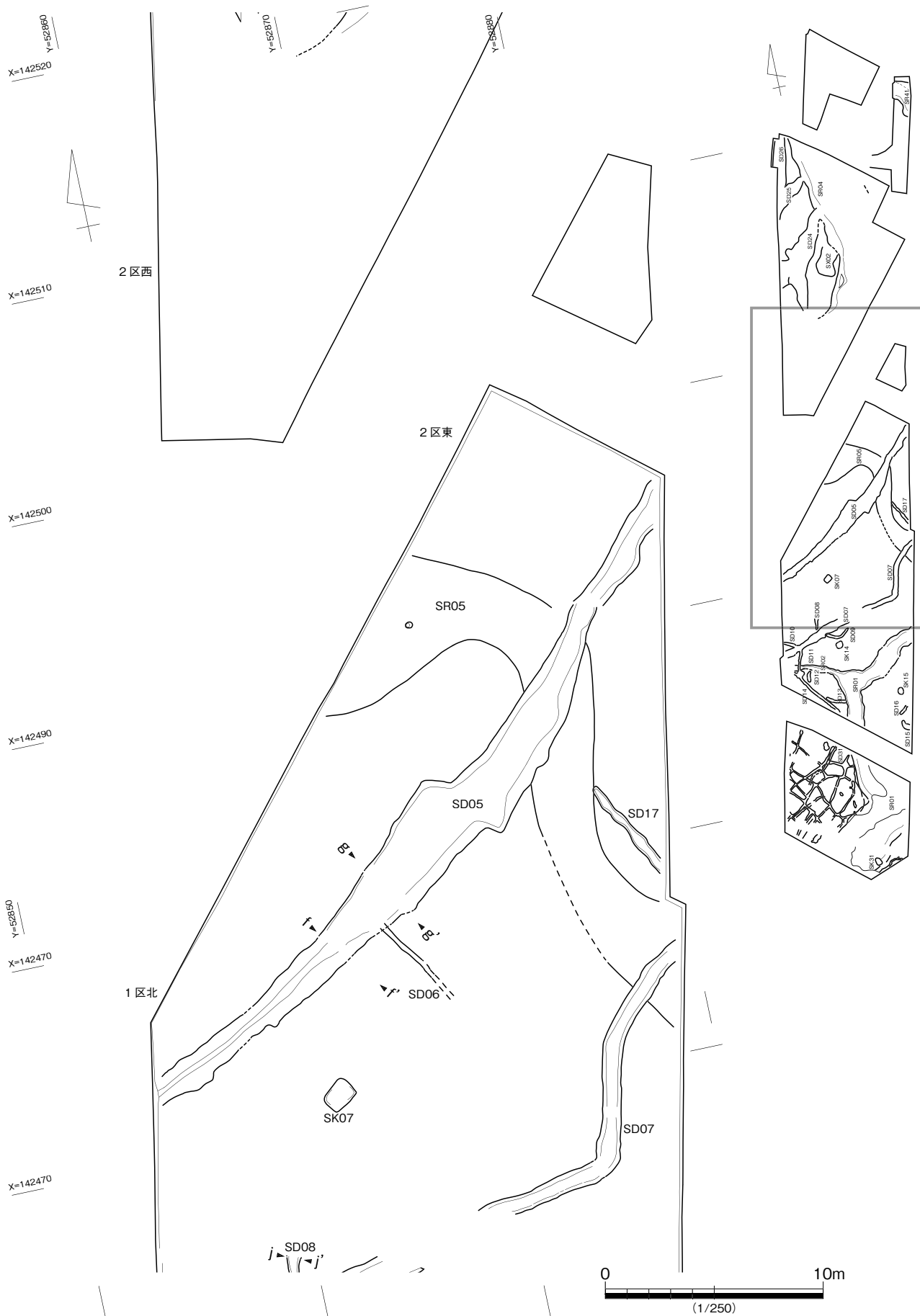


第14図 0区 東壁・東南壁断面図

※SR01を細分するA～Fは現場での理解に基づく。第57回河道1～河道3との対応関係は不明である。



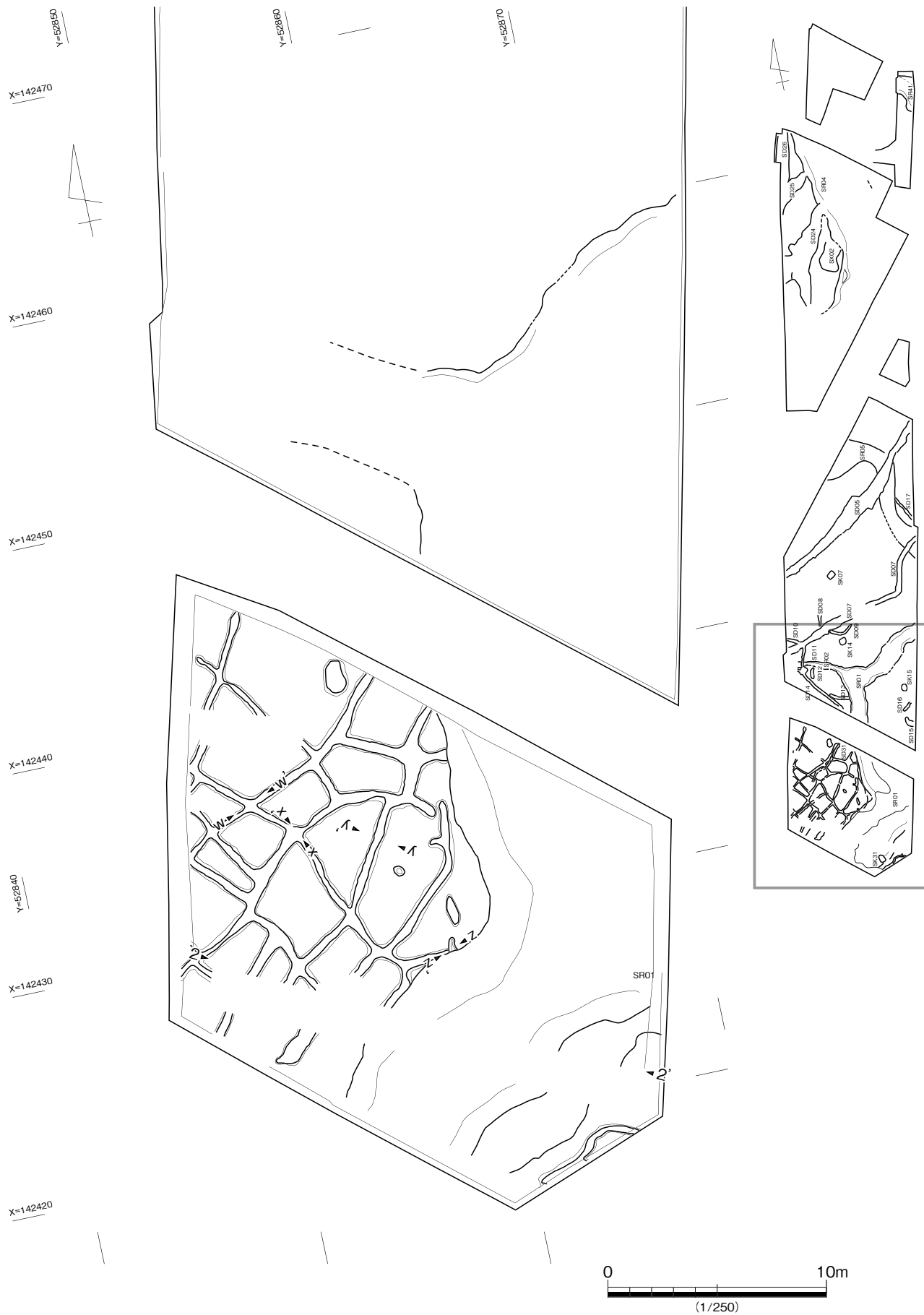
第15図 第2遺構検出面遺構配置図1



第16図 第2遺構検出面遺構配置図2



第17図 第2遺構検出面遺構配置図3-1



第 18 図 第 2 遺構検出面遺構配置図 3-2

北野遺跡の1区南以北では、弥生時代遺構面（第2遺構検出面）の上位に包含層が存在し、その上面が中世以降遺構面（第1遺構検出面）となる。北野遺跡の北約600mに位置する上林遺跡でも古代以前の包含層が確認されている。低地部に堆積したこの包含層は、古代末の「遺跡周辺の春日川支流や古川等の河床の低下」により形成が停止されと考えられており（蔵本2019, pp.32-33）、北野遺跡の包含層も同様に理解できよう。

参考文献

蔵本晋司 2019「基本層序」香川県埋蔵文化財センター編『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊上林遺跡』香川県教育委員会

第3節 遺構と遺物

1 第2遺構検出面の遺構と遺物（縄文時代晩期～弥生時代前期、弥生時代後期）

水田

SN01（調査時遺構名：0区水田）

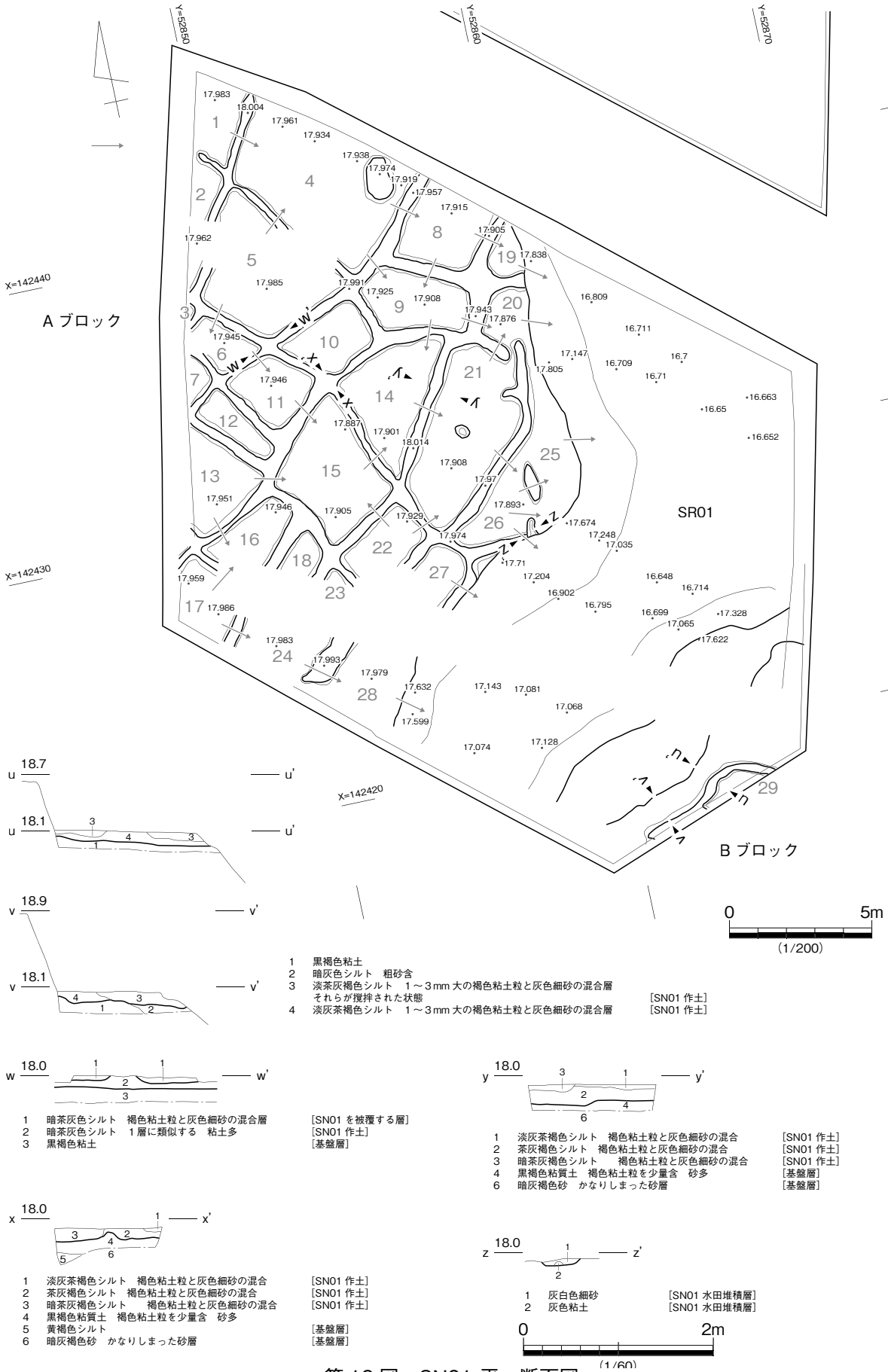
0区のSR01東西両岸で検出した水田である。西岸を水田ブロックA、東岸を水田ブロックBとする。水田ブロックA・Bともに水田面は調査地外にまで広がると推測される。検出した畦畔の幅は30～40cm、高さは1～3cm程度である。

水田ブロックAでは28区画を確認している。区画18・23と区画24の間、区画27と区画28の間はトレンチで破壊されているが、周辺の状態からトレンチ箇所には畦畔の存在を推定した。区画4の島状の高まりについては畦畔とみていない。区画の平面形状は不定形で、基軸線となる畦畔も確実ではない。特にSR01に隣接する箇所ではいびつな平面形となる。水口とみられる遺構は区画20・21間のみであるため、区画間の導排水は畦畔越しに行われたことがほぼ確実である。各区画の標高から区画間の導排水経路を復元すると、西から東にかけて田渡しが行われ、最終的にはSR01に排水されていることがわかる。より西方の標高の高い調査地外に導水用の水路などが存在している蓋然性は高い。

水田ブロックBは1区画のみである。詳細標高の数値は記録されていないが、水田機能時に流下しているであろうSR02河道2の底面との

水田ブロック	区画	面積 (㎡)	標高 (m)
A	1	4.4+	17.983
A	2	2.5+	17.962
A	3	0.1+	(未計測)
A	4	20.0+	17.919～17.961
A	5	13.8	17.985
A	6	2.5+	17.945
A	7	0.9+	(未計測)
A	8	5.6+	17.915
A	9	6.2	17.908～17.925
A	10	3.8	(未計測)
A	11	4.0	17.946
A	12	1.9	(未計測)
A	13	5.0+	17.951
A	14	7.4	17.901
A	15	9.9	17.887～17.905
A	16	3.0+	17.946
A	17	2.9+	17.959～17.986
A	18	1.0+	(未計測)
A	19	1.0+	(未計測)
A	20	2.6+	17.876
A	21	13.0	17.908
A	22	3.4+	17.929
A	23	0.1+	(未計測)
A	24	13.9+	17.983
A	25	7.0+	(未計測)
A	26	4.0	17.893
A	27	2.4	(未計測)
A	28	6.8+	17.979
B	29	0.6+	(未計測)

第2表 SN01区画の面積・標高



第19図 SN01 平・断面図

標高差（約0.8m）を考慮すると、区画29からは畦畔越しでSR01に排水されていたと推測される。

縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）以降のSR01河道2堆積後、SN01が形成され、SN01埋没後に弥生時代前期前半（前期Ⅰc期）のSK31が掘り込まれている。

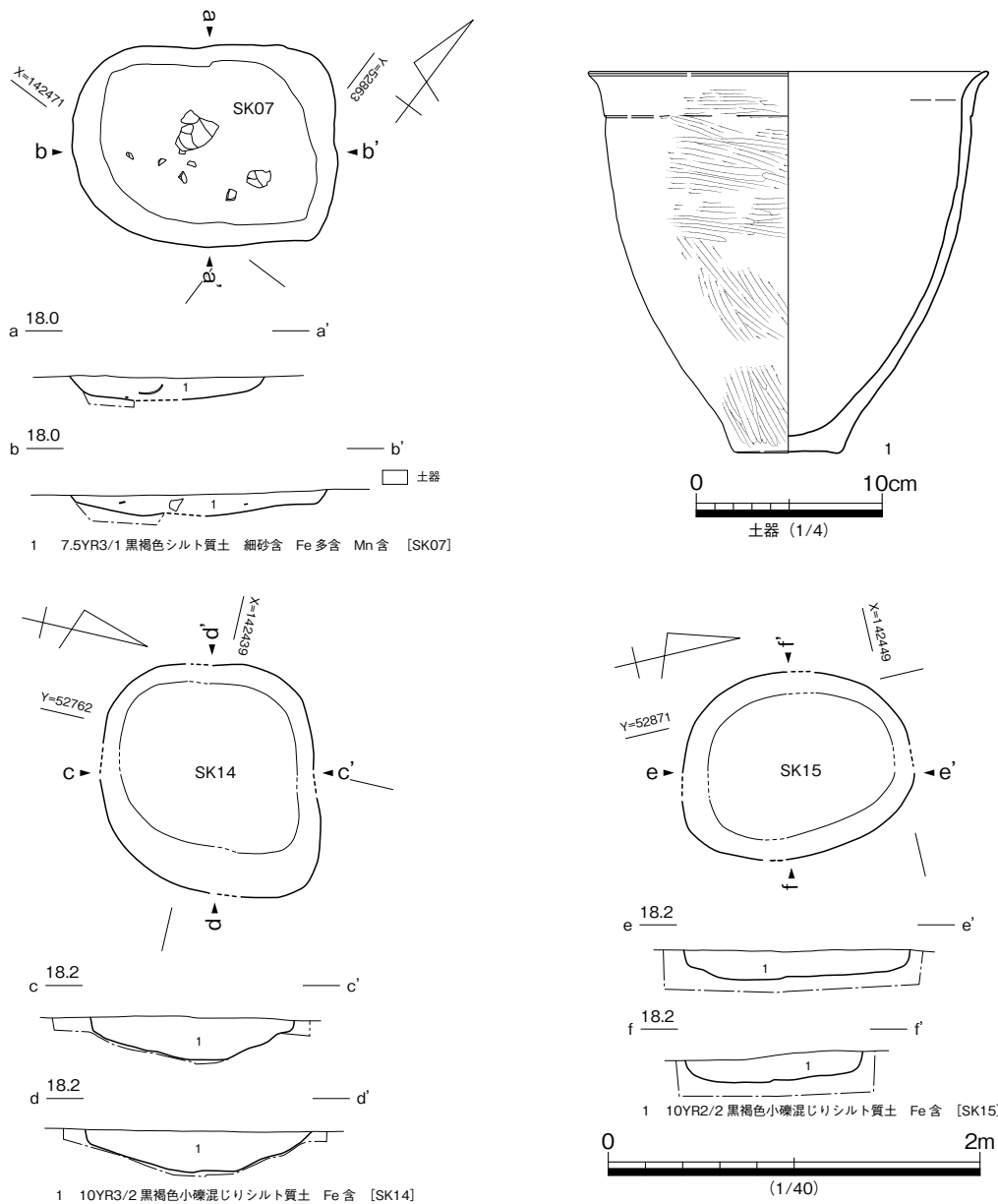
時期 SR01河道3に後出し、SK31に先行することから、縄文時代晩期（突帯文Ⅱb期）～弥生時代前期前半（前期Ⅰc期）の間に位置づけられる。

土坑

SK07（調査時遺構名：1区北SK07）

1区北で検出した平面形が隅丸方形に近い土坑である。深さは0.1m程度で底面は平坦に近い。中央の底部付近で弥生土器甕1が出土した。図化していないが、サヌカイト製剥片も確認している。

遺物 1は弥生土器甕で頸胴部境に段を有する。



第20図 SK07・14・15平・断面・出土遺物実測図

時期 1 から弥生時代前期前半（前期 I c 期）と判断できる。

SK14・15（調査時遺構名：1区南 SK14・15）

1区南で検出した土坑で、いずれも平面形はややいびつな楕円形を呈する。SK14の底部は中央に向かってやや深くなり、SK15の底面は平坦に近い。遺物は出土していない。

時期 埋土がSK07に類似するため、弥生時代前期前半（前期 I c 期）と考えられる。

SK31（調査時遺構名：0区 SK01）

0区で検出した平面形がややゆがんだ楕円形の土坑である。深さは0.2m前後で、北東、南西側の立ち上がりはテラス状を呈する。埋土は灰色～暗青灰色細砂で構成される。SR01河道1最上層（第53図13層）上面から掘り込まれており、同図13層下面に形成された水田SN01に後出することが確実である。

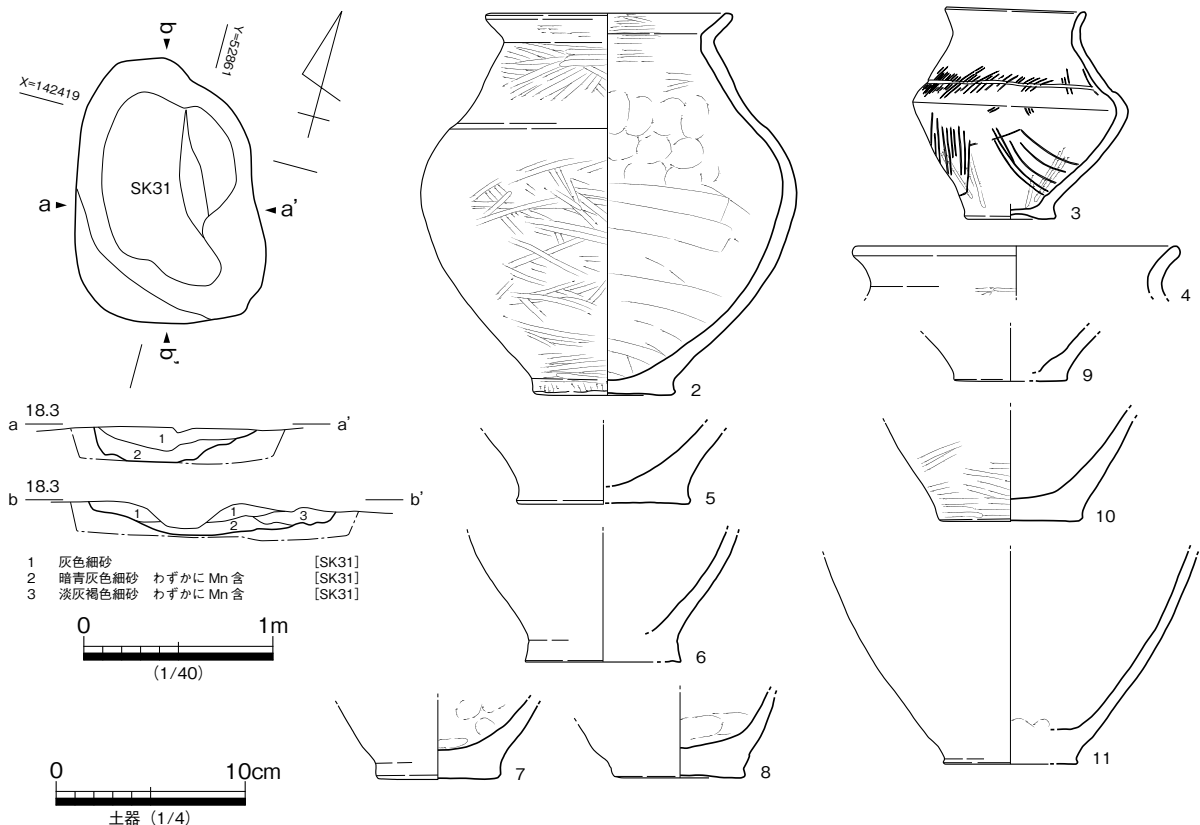
遺物 図化したのはいずれも弥生土器である。壺**2**は、口頸部境で屈曲して口縁端部が短く外反し、頸胴部境にわずかな段を有する。ヘラミガキが外面のほぼ全面と内面の口頸部に施される。壺**3**は頸胴部境に1条の沈線が巡り、沈線に先行する文様が描かれる。また、胴部下半部にも文様を有する。**4**は短く外反する壺の口縁部である。**5～9**は壺の底部、**10・11**は甕の底部である。

時期 **2・3** から弥生時代前期前半（前期 I c 期）の埋没と判断できる。

溝

SD05（調査時遺構名：1区北・2区南 SD05）

2区東から1区北にかけて南西-北東に流下する溝である。調査地北東端・南西端に比べて、調査地

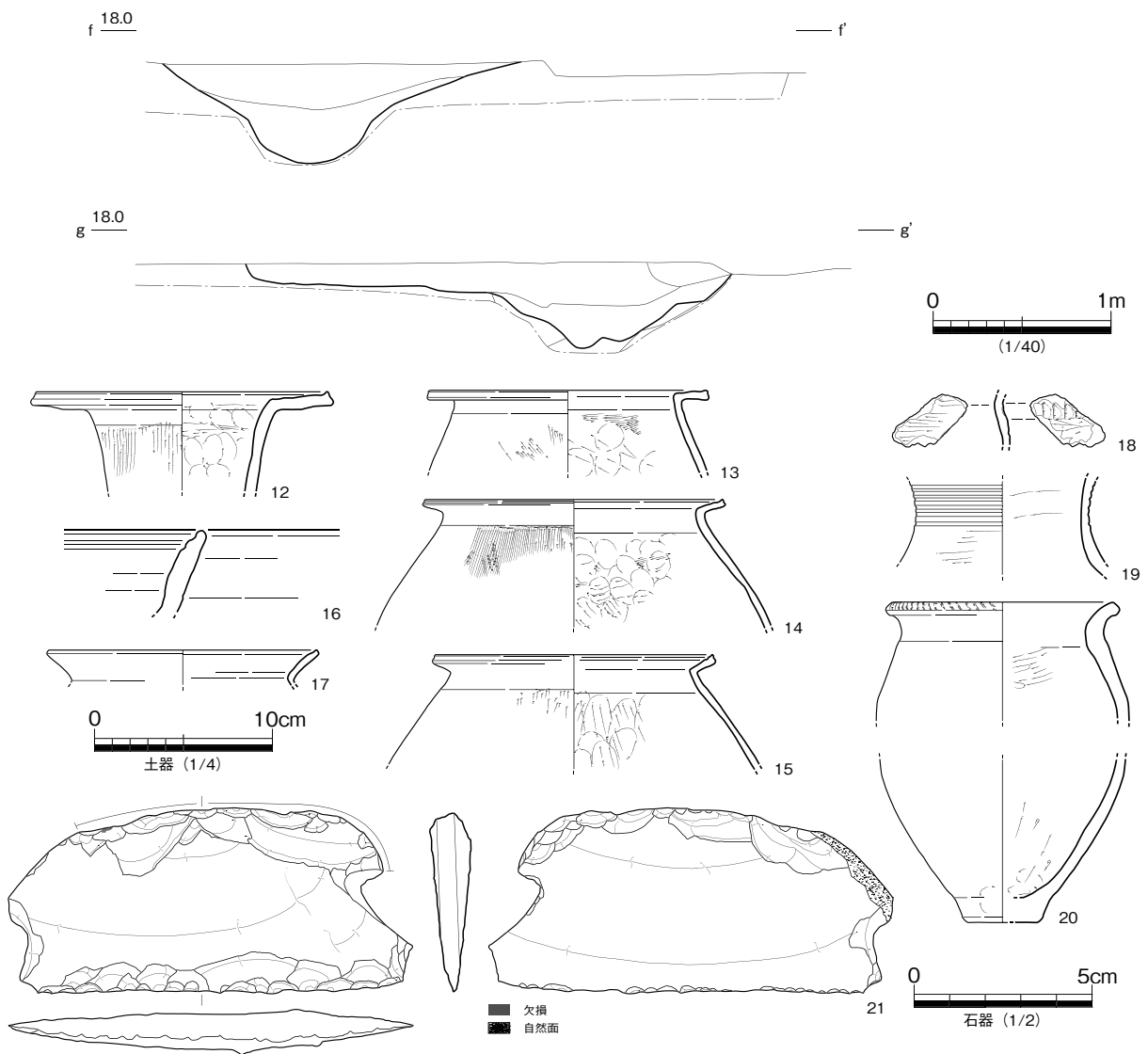


第 21 図 SK31 平・断面・出土遺物実測図

中央付近では幅がやや広がる。断面図で注記がなされていないため、各層の土質等は不明である。

遺物 12～16の弥生土器は胎土に角閃石と雲母の細粒を多量に含む。香東川下流域産、または香東川下流域産の技法を用いた土器であろう。土師器甕17と弥生土器甕20は白色系の胎土をもつ。18は縄文土器深鉢である。19は前期の弥生土器で、頸部に6条の沈線を有する。21はサヌカイト製の打製石庖丁である。上端左側に残る自然面から石理に沿って剥離された剥片を素材とする。上端部は潰され、刃部はA面から調整が行われている。両側縁に抉りを有するが、右側の抉りは偶然生じた割れを利用している可能性もある。21は弥生時代前期（前期Ic～IIa期）の19に伴うと考えられるが、弥生時代後期中葉（12～16）の可能性も否定はできない。

時期 出土土器の主体（12～16）は弥生時代後期中葉だが、最も新しい時期の17から最終埋没を古墳時代前期前半としておく。



第22図 SD05 断面・出土遺物実測図

SD07～14（調査時遺構名：1区北・南 SD07、1区南 SD08～14）

SD07は、1区南の南西部から北西に流下し、調査地東部で屈曲して北に向かう。断面図を作成した調査地西側での溝幅は1.6～1.9mで、北東部ではそれよりも狭い。埋土は褐灰色～黒褐色シルト質土層で小礫を含む。調査西端部ではSD07にSD10・11が合流する。SD11から南に続く溝がSD14・31である。また、位置関係からみてSD08・09はSD07から分岐する溝であろう。同様に、SD12はSD14から分岐、SD13はSD14に合流する溝とみられる。

SD07 出土遺物 22は砂岩製の叩石で、両平坦面中央部は敲打によって窪みが生じている。23～40は弥生土器である。高杯23の杯脚部境には突帯が貼付される。壺24の頸部はやや突出し、壺25の頸部には1条のヘラ描き沈線文が巡る。壺26の肩部の沈線は1条、27の肩部の沈線は2条となっている。壺28の胴部最大径のやや上位には沈線状の段が設けられる。29～31は壺の底部である。甕32・33は胴部上位に段を有する。

SD09 出土遺物 41～43はサヌカイト製石器である。石核41は、A面下端から数枚剥離が行われ、B面の剥離は上端と左右から行われている。上下端部の一部に潰れ痕が確認できる。42は平基式の打製石鏃である。43は下端部、または左側縁を刃部とみてスクレイパーとした。上端部と左側縁の一部は潰され、または裁断されている。右側の潰れを抉りとみれば、打製石庖丁の一部とも考えられる。

SD08・11・12・14 出土遺物 図化していないが、SD08・11から前期の弥生土器、SD12から前期の弥生土器とサヌカイト製剥片、SD14から前期の弥生土器壺・甕が出土している。

時期 37からSD07の埋没時期は弥生時代前期後半（前期Ⅱa期）と判断できる。関連する他の溝も同時期の埋没としておく。

SD16（調査時遺構名：1区南 SD16）

1区南で検出した幅約0.5m、深さ約0.1mの溝である。埋土は異なるが規模に近いSD13につながる可能性もある。

遺物 図化していないが前期の弥生土器が出土している。

時期 出土遺物と周辺の溝から弥生時代前期後半（前期Ⅱa期）の埋没とする。

SD31（調査時遺構名：0区 SD01）

0区で検出した幅約0.4～0.5m、深さ約0.15～0.2mの溝である。埋土は不明だが、規模や流下方向からSD14と同一の溝とみられる。

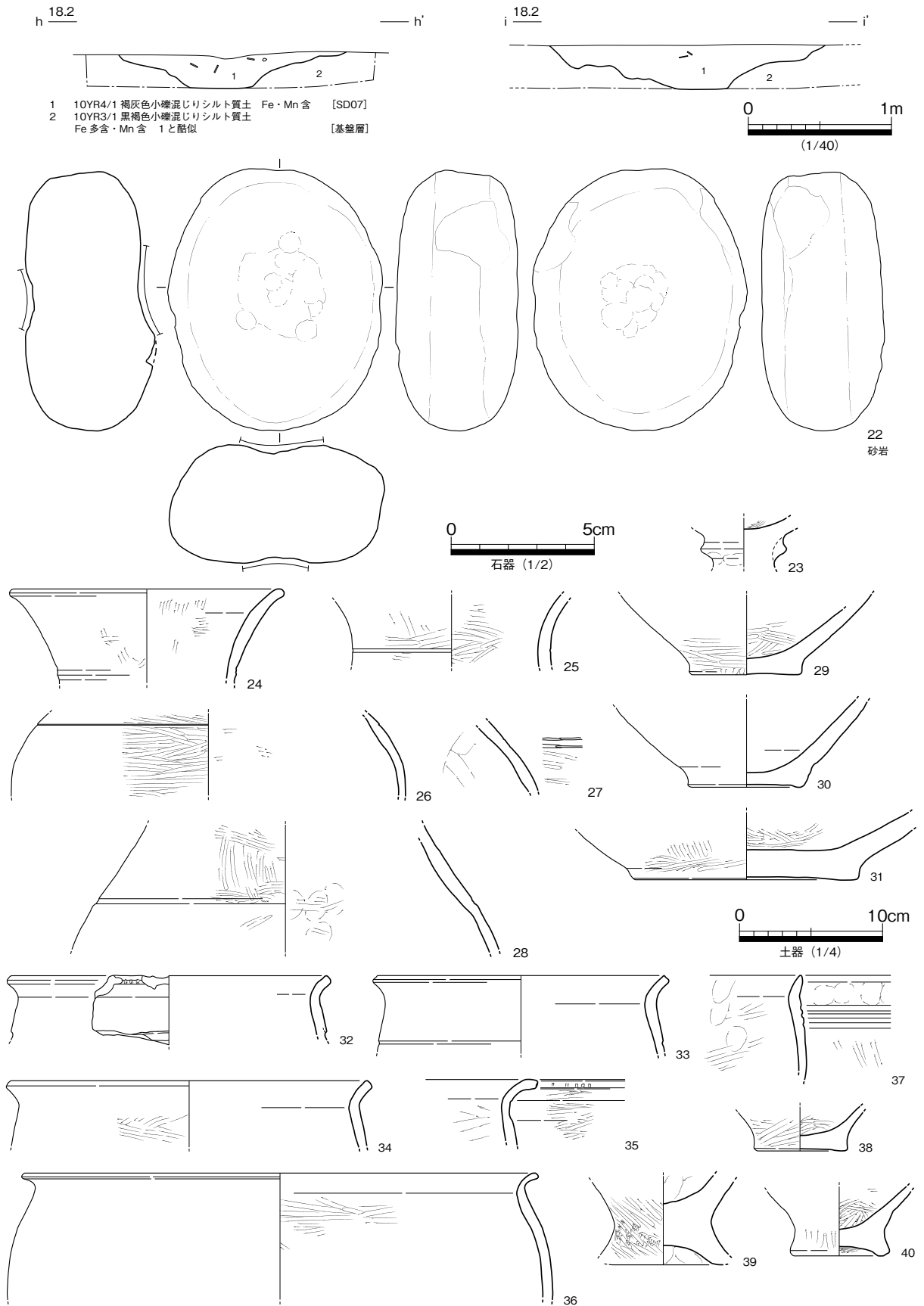
遺物 図化していないが前期の弥生土器が出土している。

時期 SD07に流入するSD14と連続するとし、SD07と同時期の弥生時代前期後半（前期Ⅱa期）の埋没と考える。

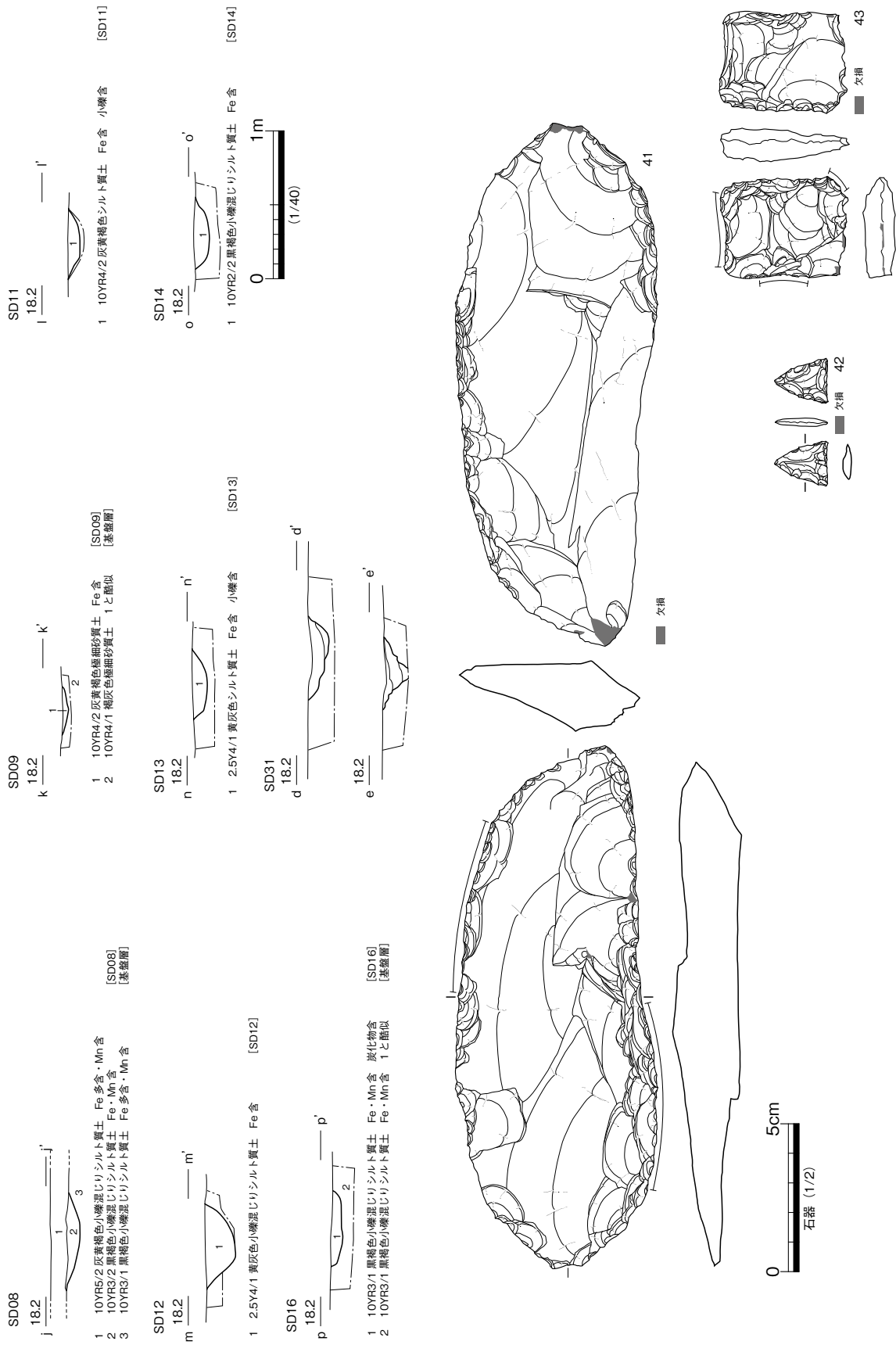
SR41（調査時遺構名：3区東 SD01）

3区東の北端で検出した自然流路で3区北のSR04と合流すると考えられる。埋土は細砂、シルト、粘土が交互に堆積する。

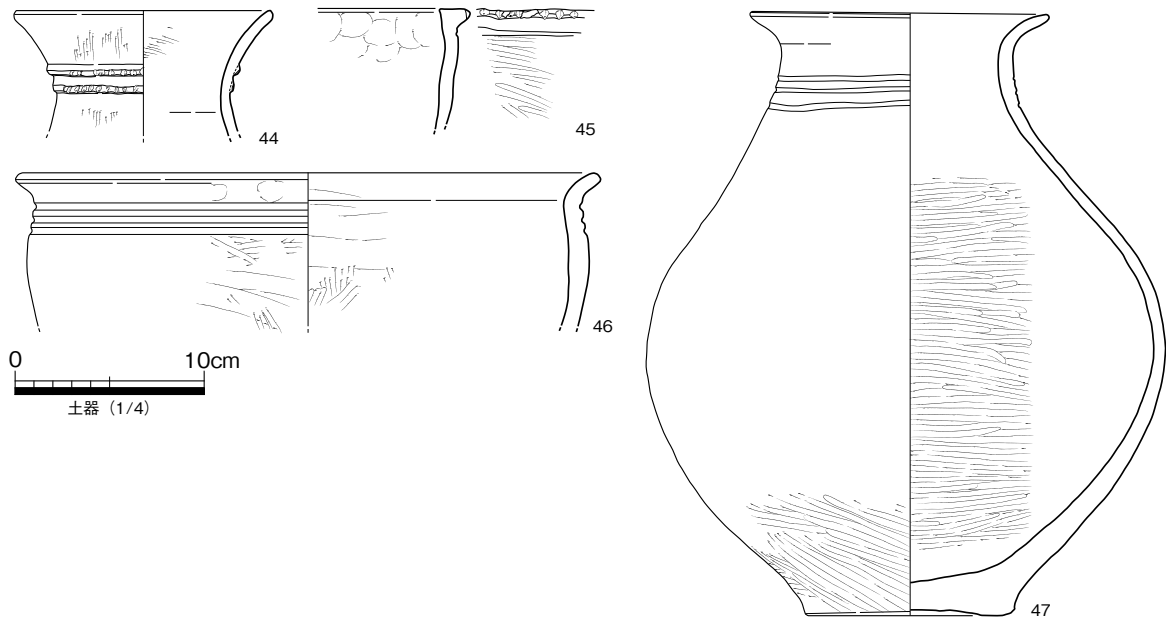
遺物 44～47は弥生土器である。壺44は口頸部境に2条の刻目をもつ貼り付け突帯を有する。45は逆L字状の口縁部をもつ甕である。46は如意型口縁で、3条の沈線が施される。47はほぼ完形の壺で、頸部に3条の沈線が巡る。



第23図 SD07 断面・出土遺物実測図



第24図 SD08・09・11～14・16・31 断面・出土遺物実測図



第25図 SR41 出土遺物実測図

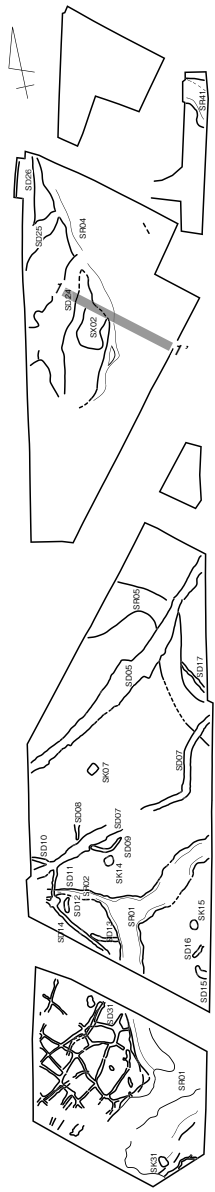
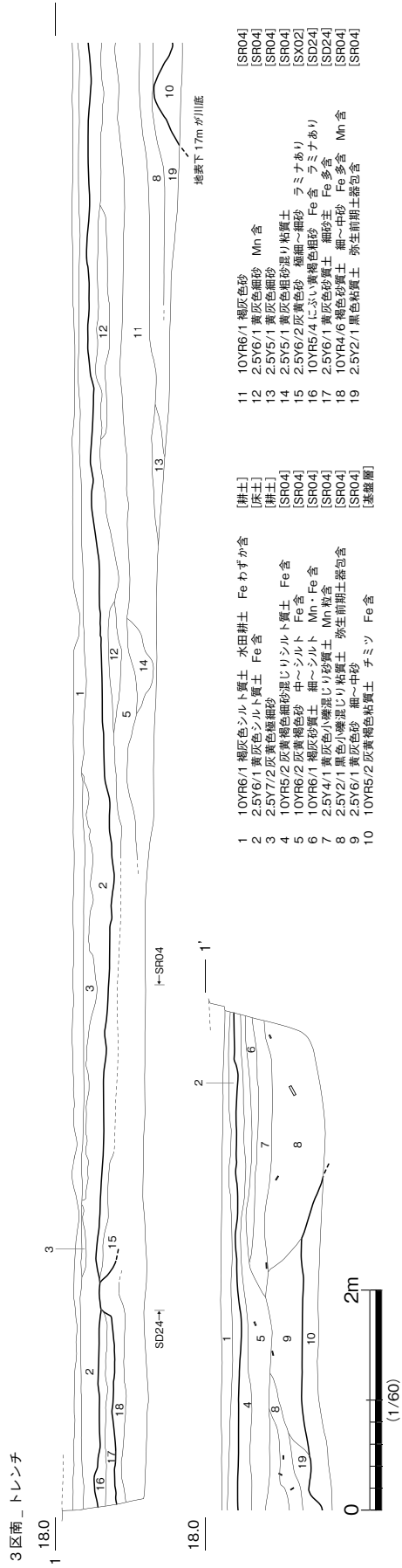
時期 44 から弥生時代前期後半（前期Ⅱb期）の埋没と判断できる。

SD24（調査時遺構名：2区西・3区南 SD24）

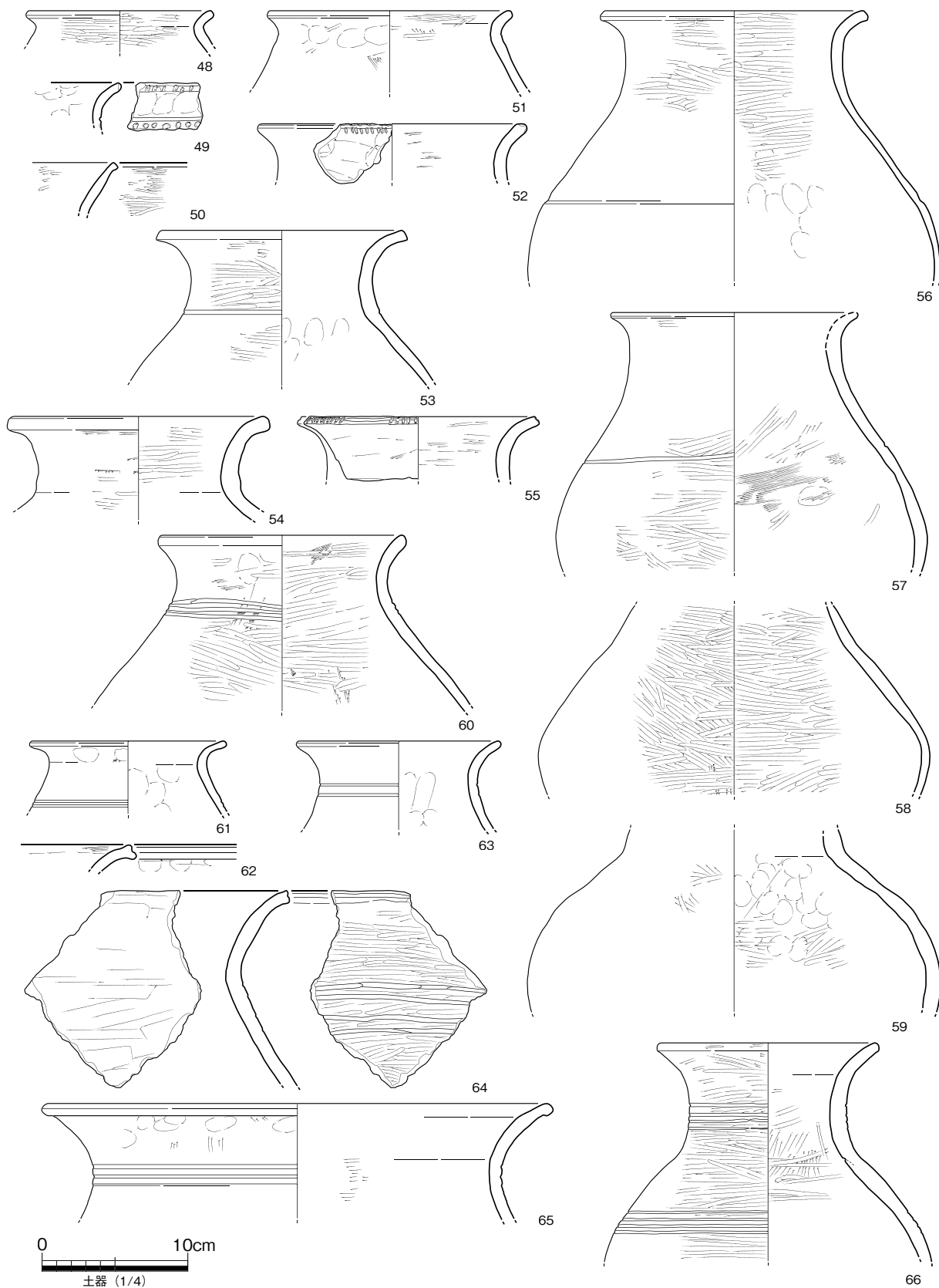
2区西から3区南にかけて検出した溝である。2区西での2筋の流路が合流し、北東に流下する。その先では古墳時代後期埋没の自然河川SR04がSD24の埋土を壊しているため、延伸部分の状況は不明である。後述するが、SR04の一部は弥生時代前期の流路であった可能性があり、この場合、SD24はSR04中の弥生時代前期流路に合流するとみられる。なお、SR04との合流付近での幅は2.8m、深さ0.8m程度で断面形がボウル状を呈するが、同地点より10mほど上流で急に浅くなり平面形も不定形となる。埋土には砂岩製の礫（直径数cm～20cm程度）が比較的多く包含されていた。これらの礫は弥生時代前期の遺構の基盤層を構成する古い流路に含まれていたと推測される。SD24からは多量の弥生土器、石器が出土している。また、土器焼成時に生じたと推測される焼成土塊もある（第5章第1・3節参照）。

遺物 48～137は弥生土器壺である。48・51の口縁部は短く屈曲して外反する。内外面にヘラミガキが施される。49は口縁端部に刻目文、口頸部境に沈線文と刺突文をもつ。50の口縁端部はやや外側に突出する。外面にベンガラと推測される赤色顔料が残る。52は頸部から口縁部にかけて緩く屈曲する。口縁端部の内外面に刻目文を有する。53は頸胴部境に1条の沈線をもつ。55の口縁端部に形成された面には沈線と刻目が施文されている。56の頸胴部境には段が設けられる。57の頸胴部境に施されているのは1条の沈線である。58・59の頸胴部境には、段、沈線文ともに認められない。60の頸胴部境には3条の沈線、61・63の頸胴部境には2条の沈線が施される。62は口縁端部に1条の沈線を有する。64は頸胴部境上位に4条の沈線、口縁端部に1条の沈線をもつ。外面のヘラミガキは密である。65の頸胴部境には段が認められ、段の上には2条の沈線がある。66は、垂直気味に立ち上がる口頸部境に4条の沈線、頸胴部境に4条の沈線を有する。外面には横方向を志向するヘラミガキが密に施される。破片の67の頸胴部境には3条の沈線が確認できる。68は頸胴部境に3条の沈線が巡る。69の頸部下位には5条の沈線が認められる。小型の壺71の頸部には、口縁部境と胴部境にそれぞれ1条の沈

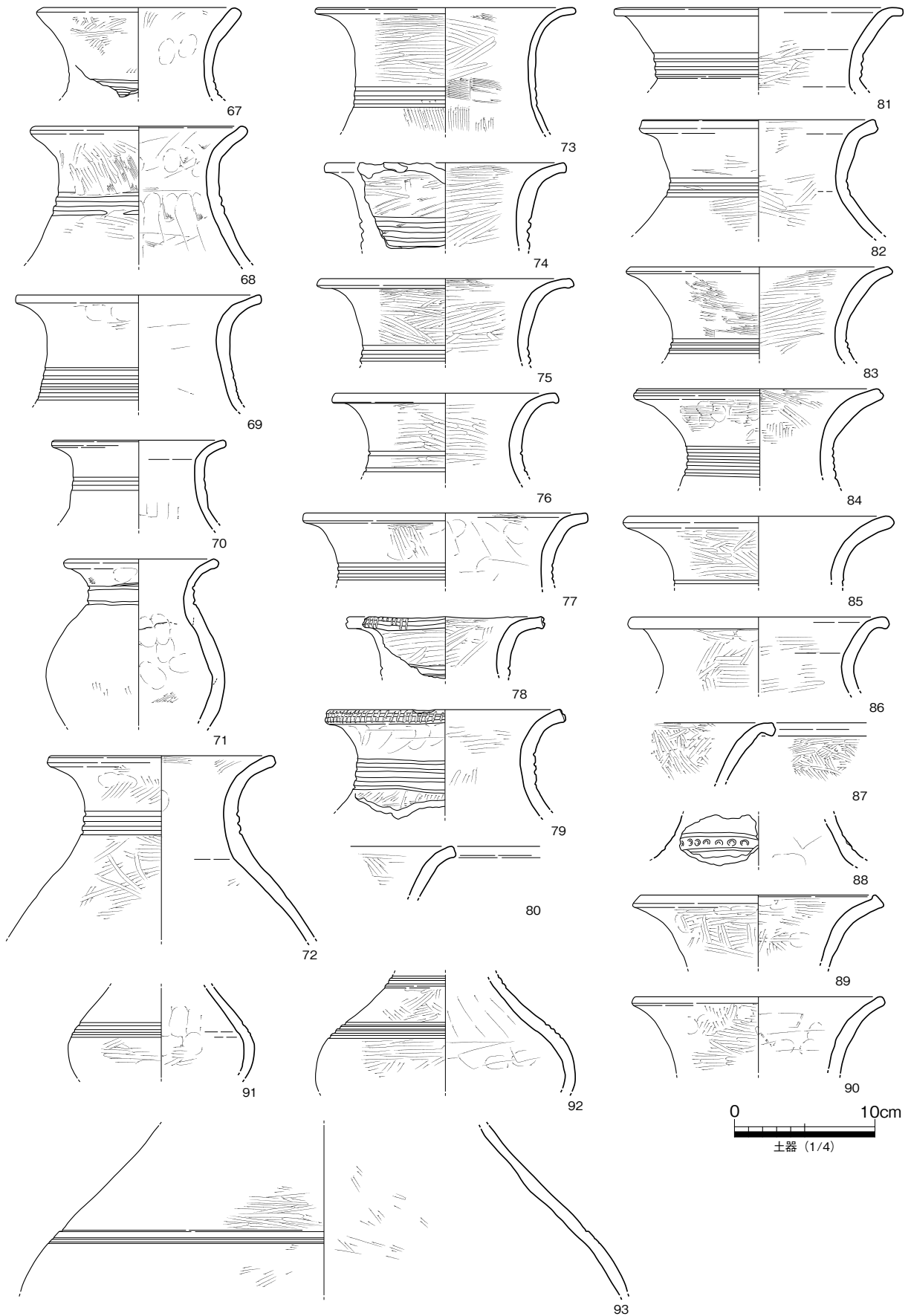




第27図 SR04 断面図



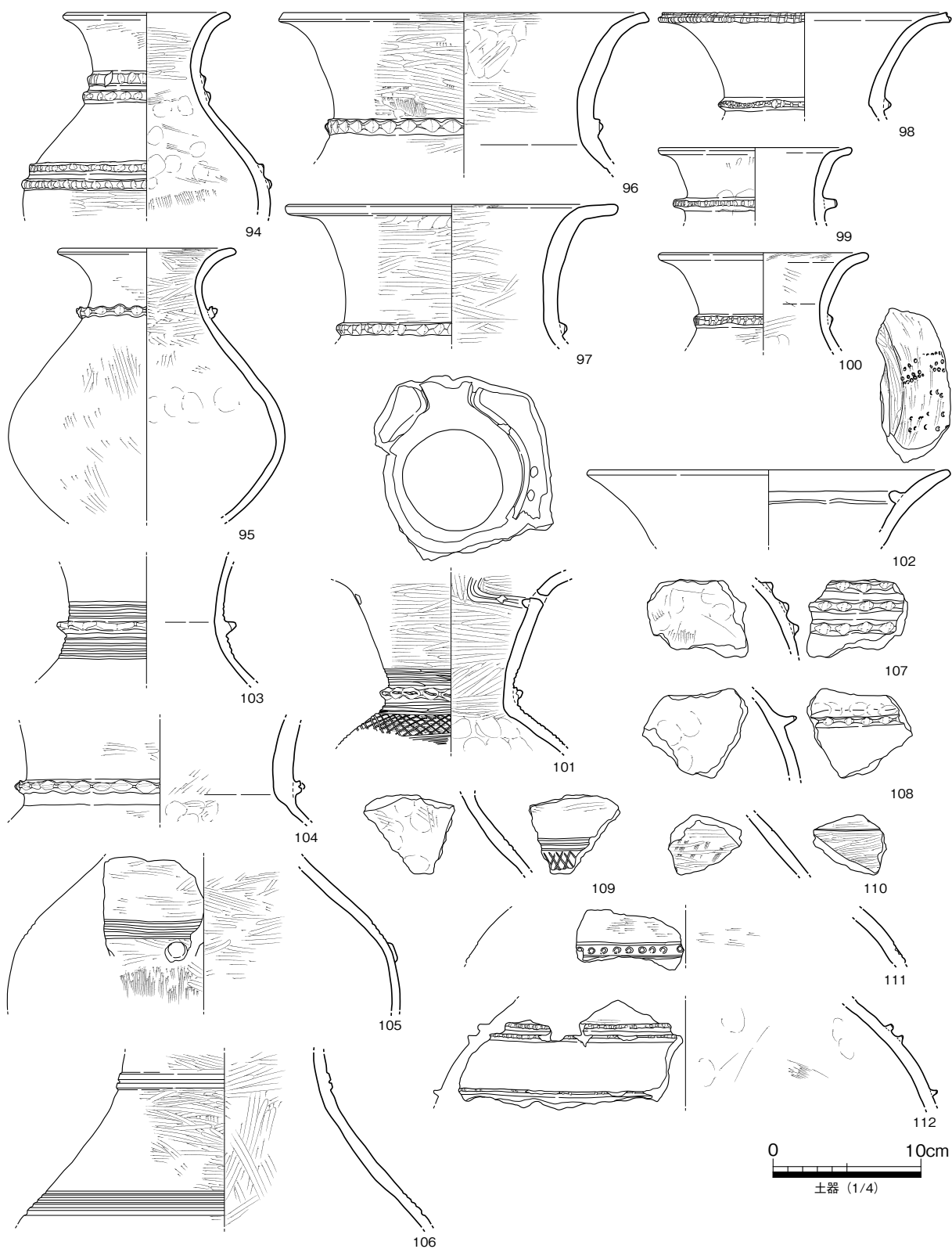
第 28 図 SD24 出土遺物実測図 1



第29図 SD24 出土遺物実測図2

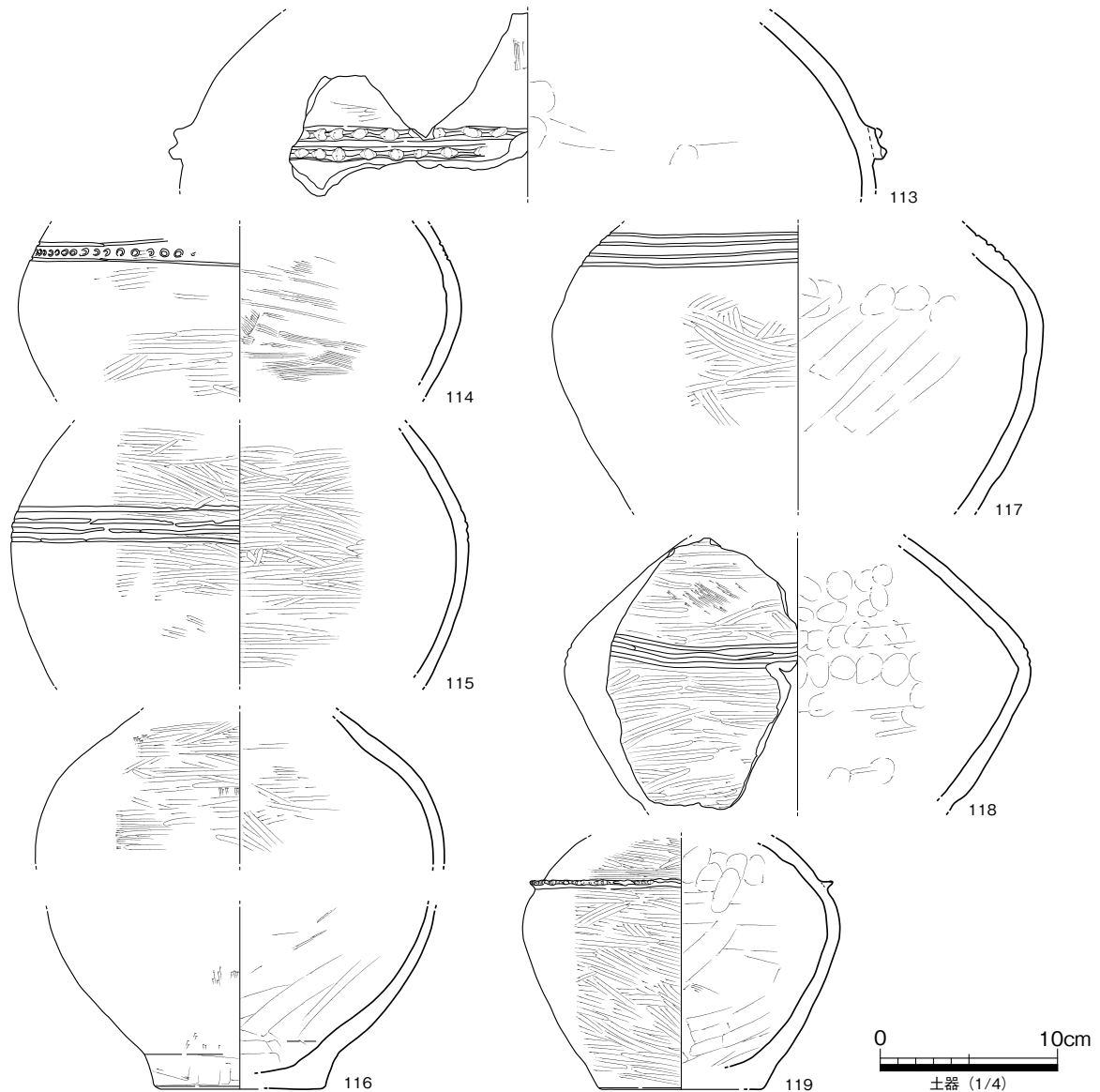
線が施される。**72・73**は頸胴部境に3条の沈線をもつ。破片資料**74・75・77**の口頸部境には少なくとも3条の沈線が確認される。**78・79**は、口頸部境に数条の沈線、口縁端部に1条の沈線と刻目文をもつ。**79**の口縁端部の刻目は全周しない。**81～86**は短い頸部から口縁部が強く外反する一群である。頸部以下が残存していないが、**80・87**も口縁部の外反度合いからみて同様の器形であろう。**81**は、口頸部境の段と、段の上に沈線3条をもつ。**82～84**の口頸部境には3～5条の沈線が巡る。破片の**85**は口頸部境に少なくとも1条の沈線を有する。**86・87**の口縁端部は下方にやや肥厚する。**88**の口頸部境には、上下を沈線に挟まれた竹管文が施文されている。**89・90**の口縁部はやや緩く外反する。**91**は頸胴部境に3条の沈線を有する。**92**は頸胴部境に4条の沈線、口頸部境に沈線文を伴う段をもつ。**93**は頸胴部境に段が設けられ、段の下位には2条の沈線が巡らされる。**94～100**は短い頸部から口縁部が外反し、口頸部境に刻目をもつ貼り付け突帯が巡る。**94**は口頸部境と頸胴部境にそれぞれ2条の貼り付け突帯を有する。**98**の口縁端部には1条の沈線と刻目文が施される。**101**は頸部から外に向かって直線的に口縁部が伸び、さらに口縁端部は外反する。口縁内面に突帯が貼付され、2孔セットの孔が穿たれる。口頸部境には貼り付け突帯が巡り、その上下を各3条の沈線が挟む。突帯は連続する刺突文により波状となっている。口頸部境の3条の沈線と、頸胴部境の4条以上の沈線で区画された範囲に斜格子文がある。**102**の口縁部内面には貼り付け突帯があり、突帯から口縁端部にかけて3列程度の刺突文が並ぶ。**103**の口頸部境には波状の凹凸をもつ貼り付け突帯が巡り、その上下を4・5条の沈線で挟む。**104**の口頸部境の貼り付け突帯は、刺突文によって凹部が連続する。**105**の頸胴部境には4条の沈線が巡り、沈線の下位に円形浮文をもつ。**106**の口頸部境には2条の削り出し突帯が巡る。頸胴部境に施されるのは5条の沈線である。破片の**107**には刻目をもつ貼り付け突帯3条が残る。**108**の刻目を伴う貼り付け突帯はやや高さがある。**109**は頸胴部境に3条の沈線と斜格子文が残る。**110**は頸胴部境に1条の細い沈線をもつ。**111**の頸胴部境に巡る竹管文は上下を沈線で挟まれる。**112**は頸胴部境に刻目が施される貼り付け突帯を2条巡らせ、やや下った箇所にも少なくとも1条の貼り付け突帯をもつ。**113～115・117・118**は胴部のみ、**116・119**は胴部から底部にかけての資料である。**116・117・119**は胴部最大径がやや上位にある。**120～137**は底部のみの資料である。**126・134**は焼成後に底部外面から穿孔が行われている。

138～257は弥生土器甕である。**138**は短く外反する口縁端外面に刻目をもち、口縁端部よりやや下った箇所に刻目を有する貼り付け突帯を巡らせる。**139**も口縁端部は短く外反し、口縁端部より下った位置に貼り付け突帯を有する。**140・141**の口縁端部はやや強めに外反し、頸胴部境には段状を有する。**142・143**は、胴部上位が垂直に立ち上がり、頸胴部境に1条の沈線をもつ。**144～154**は、胴部上位が頸部にかけて若干内傾気味となる。**148**に頸胴部境の1条の沈線が認められるほかは無文である。**155**は、器壁がやや薄く、口縁端部を外側に強く屈曲させている。**156・157**は胴部上位に突起をもつ。**160・161**は頸部に強いナデが施されている。**158**は、口縁部の折り返しがやや強く、口縁端部に刻目をもつ。**162**は口縁端部の上端、下端にそれぞれ刻目を有する。**163**は頸胴部境には3条の削り出し突帯をもつ。口縁端部の刻目は全周しない。**159・164～183**は如意状口縁をもち、頸胴部境に3～4条のヘラ描き沈線を巡らせる。**182・183**の3条の沈線の下には突起状の浮文が貼付されている。同じく如意状口縁の**184**には沈線が5条巡る。**185**は口縁部が強く屈曲し、口頸部境が内面にやや突出する。**186・187・189～212**は逆L字状の口縁部を有する一群である。口縁端部が肥厚する**188**も逆L状口縁の可能性があり、**189～208**は口縁端部に刻目をもち、頸胴部境に3～4条のヘラ描き沈線を巡らせる。

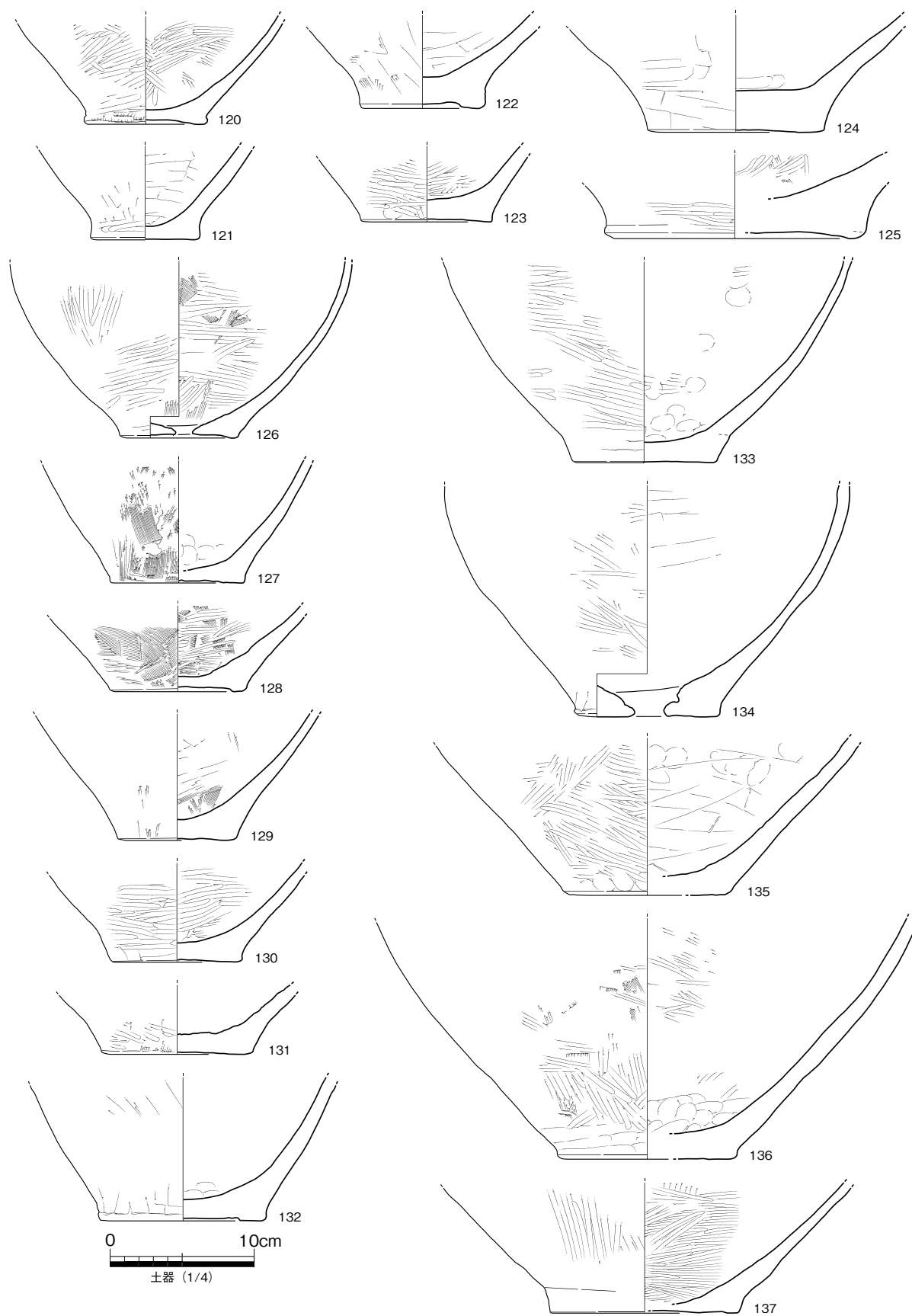


第30図 SD24 出土遺物実測図3

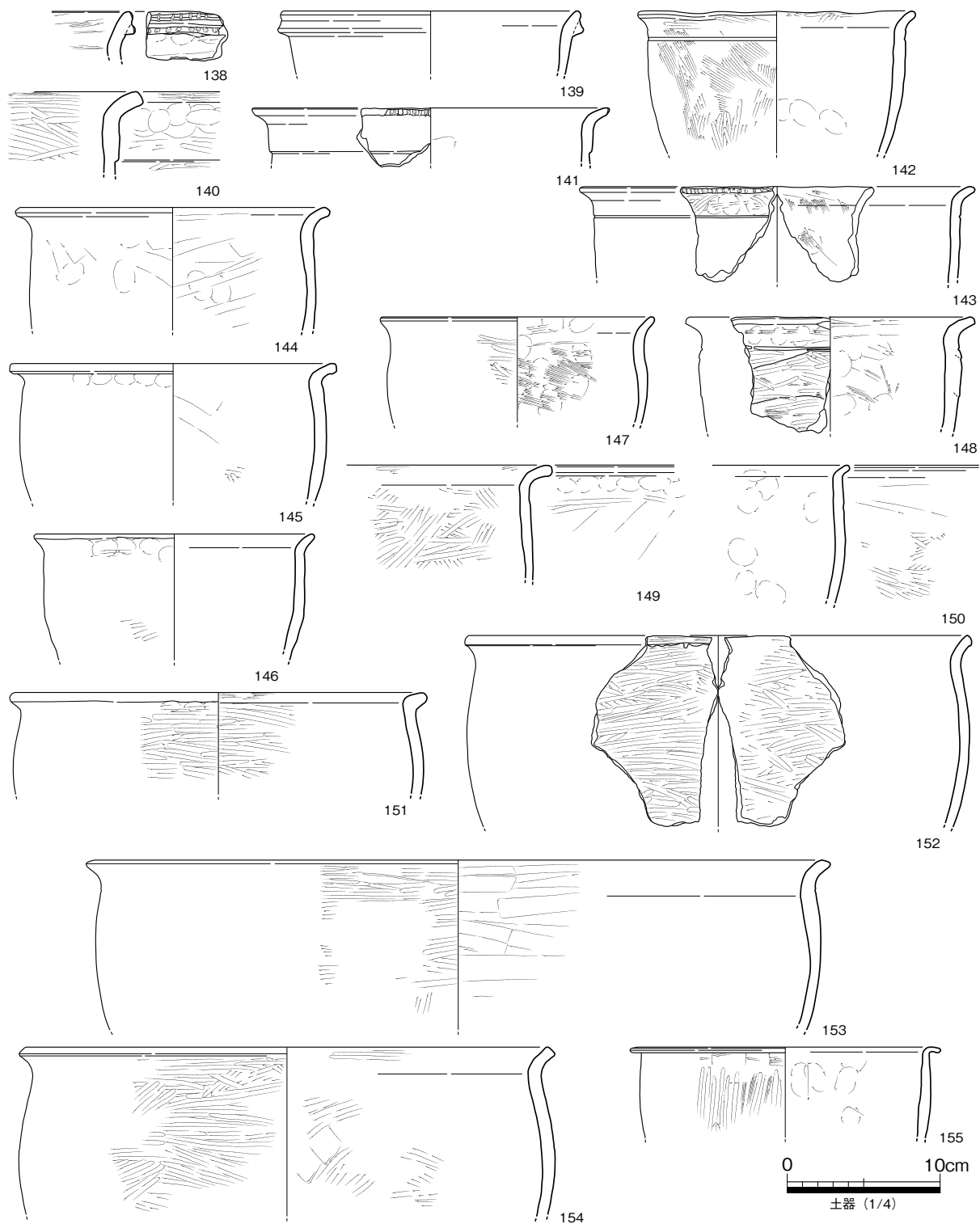
209のヘラ描き沈線は5条である。187は頸胴部境に細い沈線が施文される。194は3条の沈線の直下に、縦方向の連続するヘラ描き文を有する。210は口縁部上端面に山形文が描かれる。211は口縁端部が波状に仕上げられる。212は2条の沈線で挟まれた中に竹管文をもつ。213～216は、口縁端部が内外面に延びる。215・216は胴部上位にそれぞれ4条、7条の沈線が施文されている。217の口縁部は、やや内傾気味の胴部から短く外に屈曲する。218の口縁端部は内部上方に延び、外側には突帯が貼付される。219の口縁部は外側下方に屈曲する。220～226は口縁端部からやや下位に突帯が巡る。221～226の突帯は刻目を有する。227～229は波状の口縁部をもつ。230の口縁端部はヘラ状工具での連続する押圧によって波状になっている。突帯も同様である。小型の234は、やや厚い口縁端部をもつ。232・233は胴部からほぼ垂直に立ち上がって口縁部となる。232の残存する口縁部のうち、外反する部分が1か所認められる。235～257は底部である。251～256には焼成後に外面から孔が穿たれている。258～275は弥生土器鉢である。258～264は如意状の口縁部をもち、260・263・264には沈線が



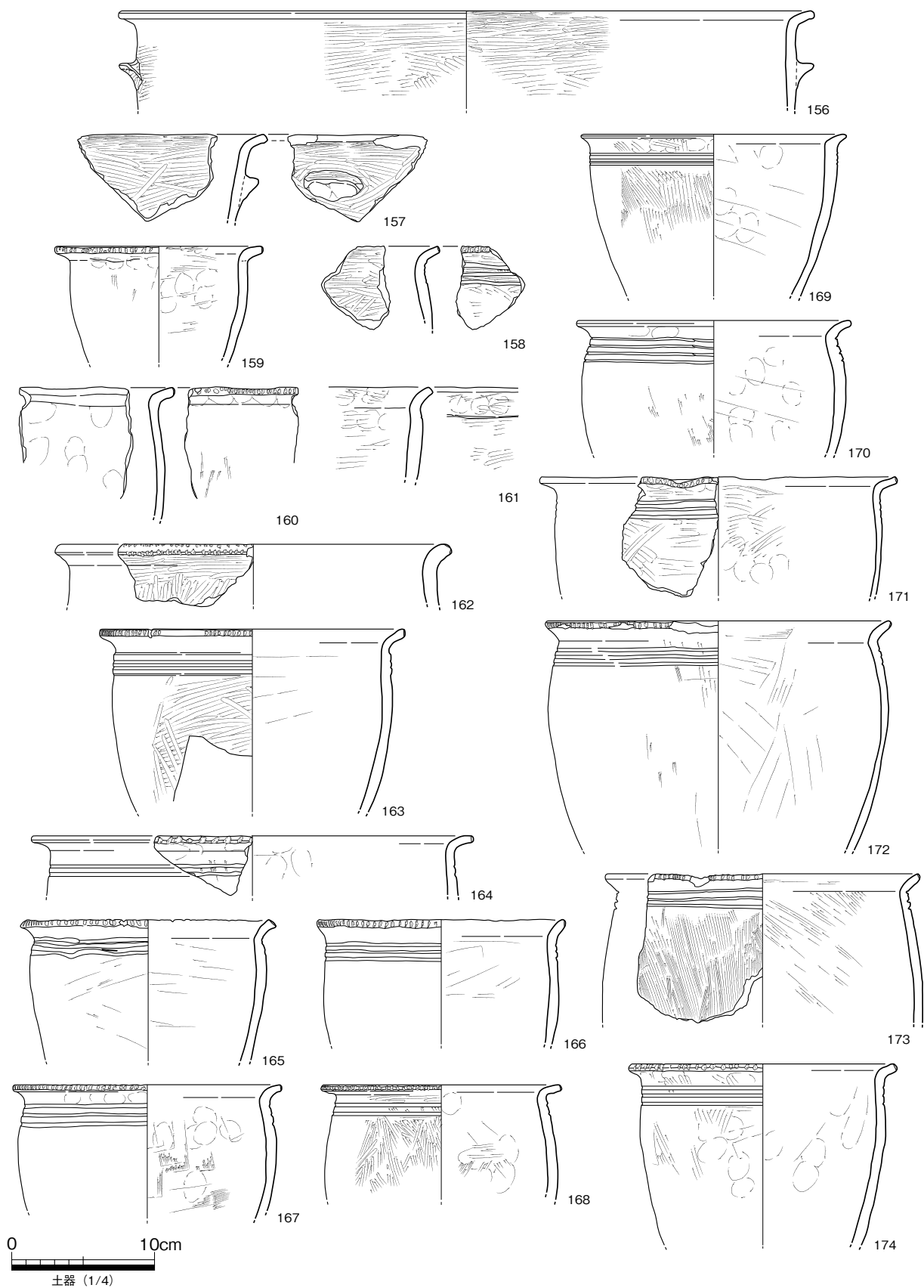
第31図 SD24 出土遺物実測図4



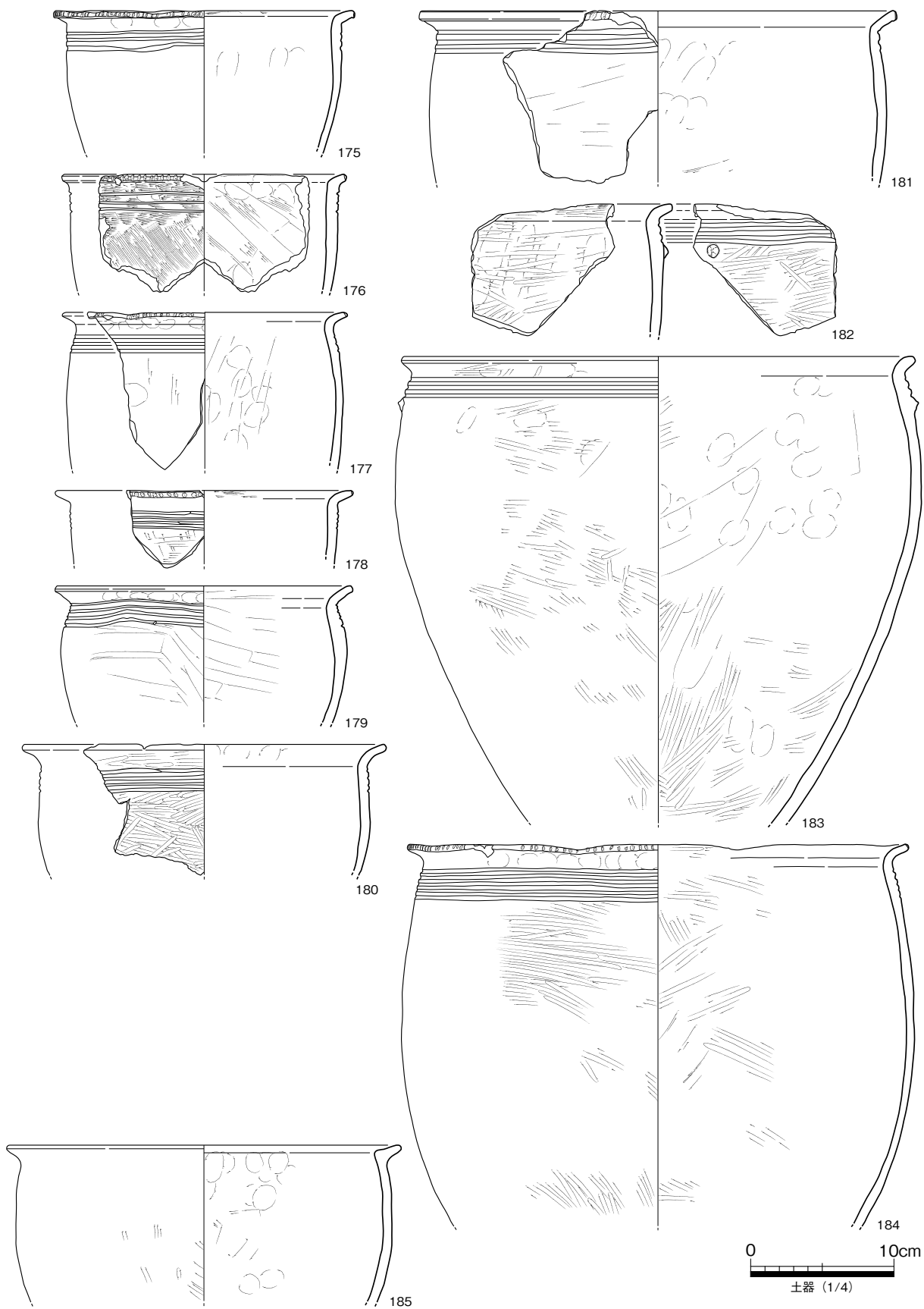
第32図 SD24 出土遺物実測図5



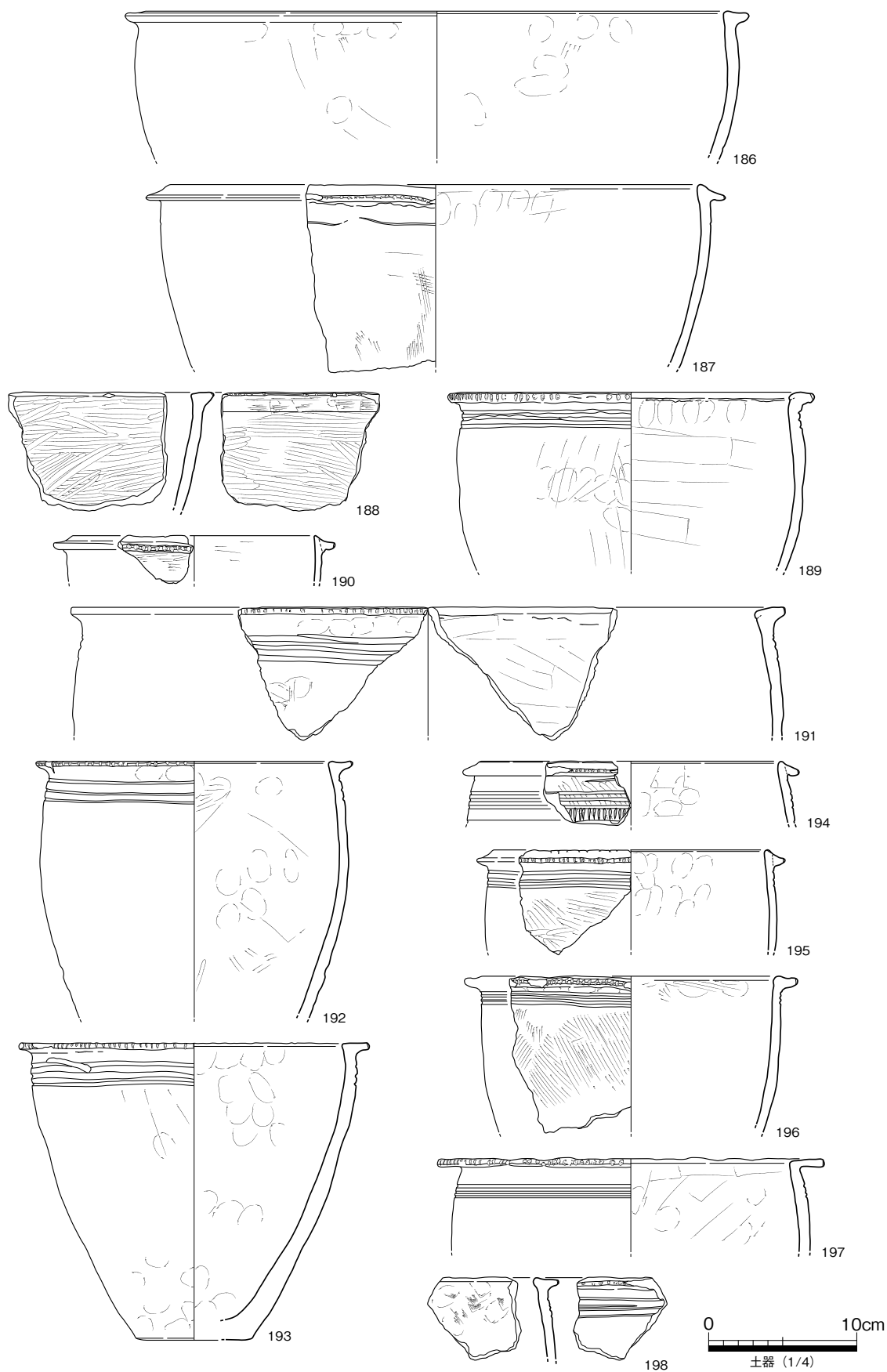
第33図 SD24 出土遺物実測図6



第34図 SD24 出土遺物実測図7



第35図 SD24 出土遺物実測図8



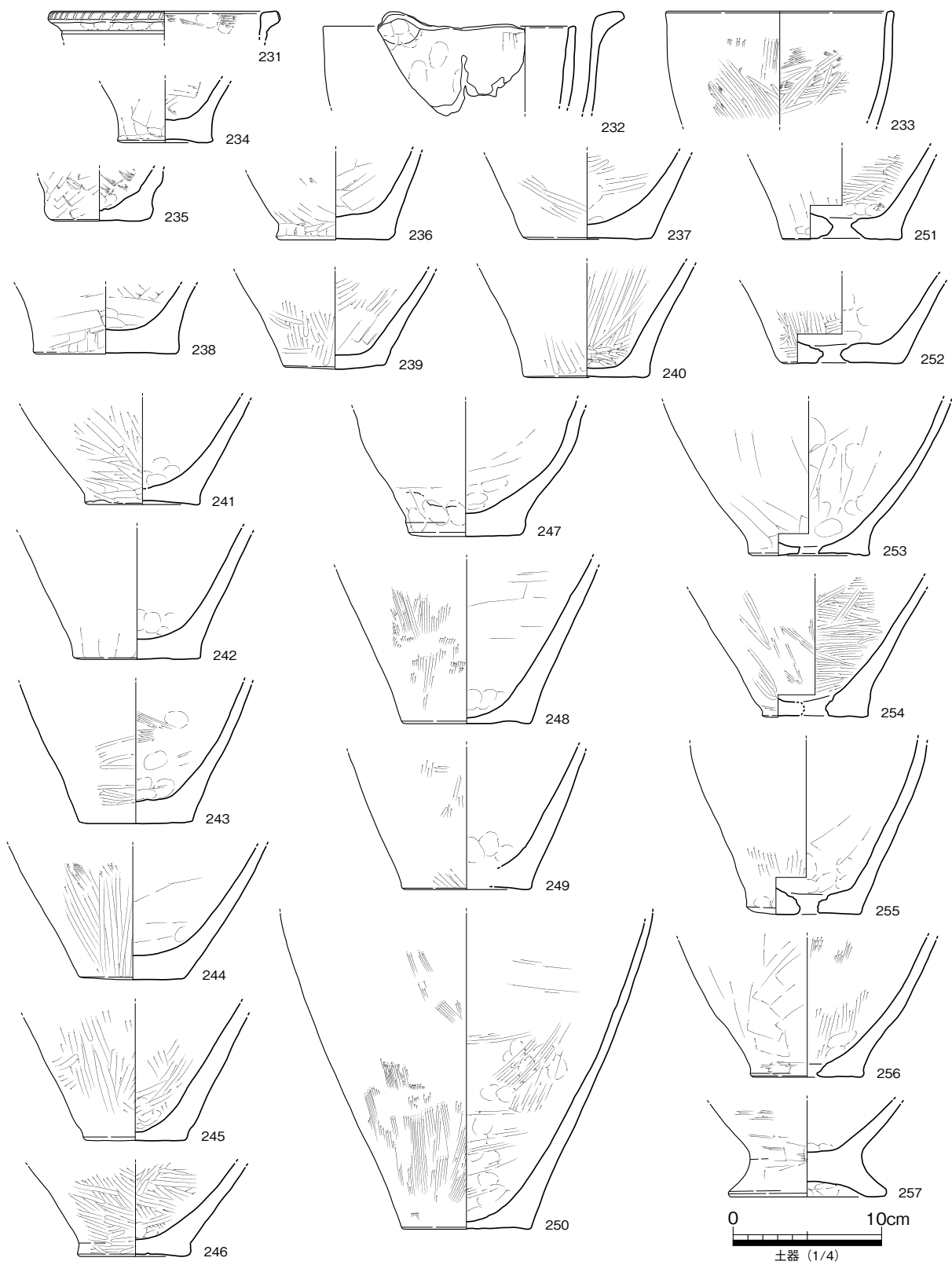
第36図 SD24 出土遺物実測図9



第 37 図 SD24 出土遺物実測図 10



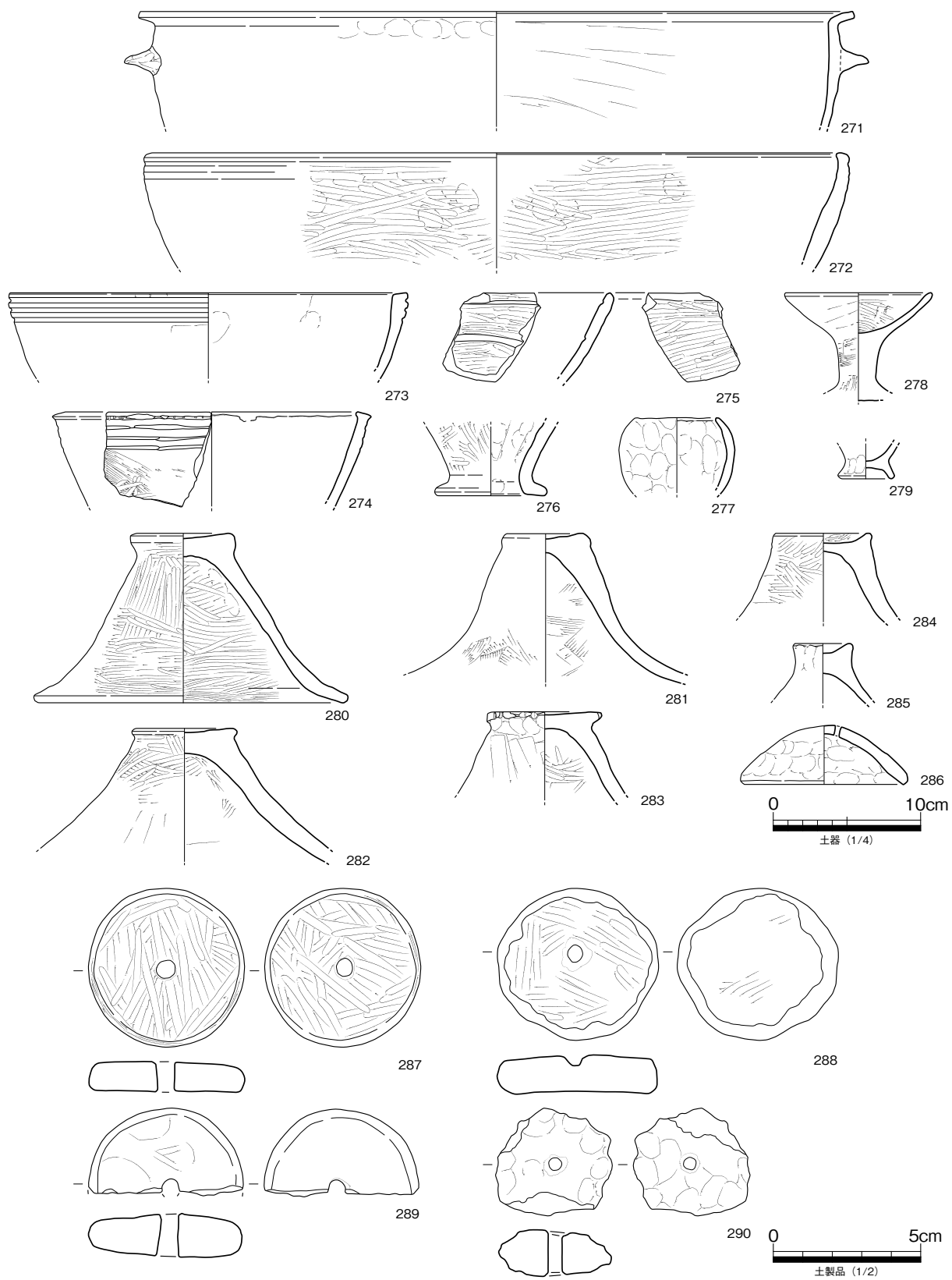
第38図 SD24 出土遺物実測図 11



第 39 図 SD24 出土遺物実測図 12



第40図 SD24 出土遺物実測図 13



第 41 図 SD24 出土遺物実測図 14